



## 飯野ビル全景



ビル正面入口から受付フロアまでの  
直通エスカレーター

## \*\*\* 2015年度新年賀詞交歓会の御案内 \*\*\*

恒例の新年賀詞交歓会を下記要領にて開催いたします。

場所は、**双日(株)の本社（飯野ビルディング）**で行います。  
皆様ふるってご参加下さい。

開 催 日 : 2015年 **1月16日（金）12:00～**（開場は11:30～）

会 場 : **双日株式会社・本社21階 大会議室**  
(2124, 2125, 2126, 2127会議室)  
所番地——千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング 内

アクセス : \* メトロ千代田線・日比谷線「霞ヶ関」下車、**出口C4**直結  
\* メトロ丸の内線「霞ヶ関」下車、**出口B2**、徒歩5分  
\* メトロ銀座線「虎ノ門」下車、**出口9**、徒歩3分

会 費 : **無 料**（軽食、飲物を用意致します。）

### 特記事項（大切です！）

このビルはセキュリティ確保のため、**入館カード**というものが**必要**です。

ゲート（一種の改札口）を通るには、**必ず入館カード**を使います。

このカードは、お帰りの時も使いますので、失くさぬよう御注意下さい。

ゲート出入りの要領は、SUICAやPASMOの使い方と全く同じです。

- ① この頁は、入館カード入手のための引換券兼用としています。

**下の枠の中に氏名を記入の上、この頁を切り取って**持参して下さい。

- ② 当日は、ビル3階の双日(株)の受付近辺にいる社友会の世話人にこの引換券を渡し、**入館カード**をお受け取り下さい。

11時半から12時正午までの間は、3階オフィスロビー及び受付の横に社友会世話人が控えております。

万一、12時以降にお着きになった場合には、双日(株)の受付嬢が対応致します。

(3階受付までは、ビル1階の正面入口から直通エスカレーターをご利用下さい。)

|                  |     |
|------------------|-----|
| <b>入館カード 引換券</b> |     |
| ニチメン東京社友会<br>会 員 | 氏 名 |

\* その他お問い合わせは会報末尾の「世話人一覧表」記載の世話人にお寄せ下さい。

FAX: 03-6858-7216, Eメール: menkwa@sojitz.com

(以上)

## 双日(株) オフィス 周辺の案内図

〒100-8691 千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング



## 地下鉄アクセス

メトロ千代田線・日比谷線「霞ヶ関」下車、出口C4

メトロ丸の内線「霞ヶ関」下車、出口B2

メトロ銀座線「虎ノ門」下車、出口9

## 2014年度総会 挨拶

会長 島 崎 京 一



皆さん、今日は正月の賀詞交歓会以来の方が多いと思いますが、天気予報によれば台風のため大変なところを、たくさんの方に総会に列席していただき、まことに有難うございます。

このような総会について考えて見ますと、この私も全くそうなのですが、出て来られる方々のお気持ちは大変ニチメンが好きである、ということだと思うんです。それを言葉で言うとするばどういうふうに表したらいいのか。

私も現役時代の後半にしばらく大阪のことを見ていた時のことですが、そこで長月会の会合に時々出ておったのですが、いわゆる大阪のOBたちの話の輪に入っていると、「わてら、ニチメン好きやねん!」と、こういう言い方をよく耳にしたものです。実はこの私も大阪出身ですので、「ニチメン好きやねん」というあの表現の仕方というのがなんとも懐かしい感じでございます。

とまあ、そんなふうにして今日お集まりの皆さん、私を含めてあのニチメンが大好きである、そして愛してるんだということは、30年40年という人生の一番重要な20代、30代、40代そして50代を通じて勤め上げた会社が、好きである懐かしいと思っていることであり大変幸福なことである。中にはニチメンと聞くだけでも嫌だ、という方もたまにはいますが、大多数の方々には残りの人生の中をこうして集まる、こういうふうにしてお会いできる、というのは大変幸福な者同士であると感じております。

ということで、この総会を開催するにつきましては、これまで一ツ橋（如水会館）でやってきたのですが、今回からはこちら双日さんのビルをお借りしてやろうということを、世話人会で相談して決めました。これにはいろんな意味が込められています。一つにはここは最近一ツ橋より交通の便が非常によく多くの人が集まりやすいのではなかろうか。二つ目にはこの方が向こうよりは費用も安く仕上がるんじゃないか。こうして懇親会の会費も無料とした上で皆さんからいただいている年会費三千円と、双日さんからの援助金だけで賄って行こうということになり、世話人会の担当者には大変ご苦勞をおかけしました。

さような次第で、日本の人口と同じようにこの会の会員もどんどん目減りしてゆきますが、それでもなんとか一人でも沢山の「ニチメン好き」な人達に集まっていただき、総会と懇親会が引き続いてやれるようにしてゆきたい、というつもりで今回こちらでやることとした次第です。

唯一つお断わりしておきますのは、これまで一ツ橋でやってきましたのは、ニチメンのOBの中には一ツ橋（大学）出身者が多いことで、その皆さん方が一ツ橋の地の母校の会館でやることを楽しみにしておられたことと思うんです。その方々には今申し上げたような理由でこちらにした事情を、何卒ご理解いただきたいと思います。

それからもう一つ、これは本会の人事にかかわることですが、社友会の立ち上げ以来ずっと世話人代表をしてこられた倉又さんが、一年ほど腰痛で仕事ができなくなっていたところを、今日また元気になって復活されました。そしてこの間一年間、長谷川さんが代表を代行してやってこられました。

今回ここに皆さんのご賛同をいただいて、倉又さんと長谷川さんには「副会長」になっていただきたい、というふうに思っております。

それで、私自身につきましては、新しい会長が選任されるまでの間一年間だけ、会長をやろうと思ってきたのですが、倉又さんの病氣やらなんやら、また後任に適当な人が見つからなかったことなどもあって、もう一年やることに致しました。

今後はこの新しい副会長二人と世話人の皆さんと相談しながら、来年度には新しい会長を選びたいと思っています。

折角皆さんの力で作ったこの会でございますから、できるだけ長続きできるようにやってゆきたい、そんなふうに考えております。

今日はまた、双日から原副会長以下、沢山の役員の皆様に御出でいただきまして厚く御礼申し上げます。因みに双日社員の皆様方も、今後はここに会場を変えたことで一人でも多く来易くなることでしょう。

ひとつ今後とも一層のご支援をいただきながら、この会を更に盛り上げてゆきたいと思っていますので、どうかよろしくお願い申し上げます。本日はさような次第で人事を含めたご報告ということで、最初のご挨拶に致します。

どうも有難うございました。

(以上)



## 2014年総会 来賓ご挨拶

双日(株) 代表取締役副社長執行役員 茂 木 良 夫



ご紹介にあずかりました茂木でございます。

本来であれば社長の佐藤がご挨拶をすべきところですが、本日、佐藤は海外出張のため、私が代りにご挨拶を申し上げたいと思います。

さて、先月の24日に双日の第11回株主総会を開催致しました。事業報告における当期純利益では、当初目標としていた250億円を9%上積みして、273億円としてご報告をさせて頂きました。これもひとえに株主の皆様、あるいはお取引先、関係金融機関、そしてOBの方々のご支援の賜物と感謝する次第でございます。

今期2014年度は、私共が立てた中期経営計画”Change for Challenge 2014”の最終年度でございます。当初の計画では、最終年度には450億円の当期純利益を達成したいというものでしたが、経済環境悪化の影響もありまして、今期につきましては、先期の273億円を2割程上回る330億円の当期純利益を達成すべく役職員一同汗をかいているところでございます。中国経済の減速もあり、また全般的な資源価格の下落などもありますが、生活産業部門、化学部門、そして機械部門、これらが順調に収益を伸ばしております。当社の役職員一同は、何としても330億円の当期利益を達成すべく頑張っておりますので、引き続き皆様のご支援をお願いしたいと思います。

先ほど私は、第11回の株主総会が開催されたと申し上げましたが、即ち双日の誕生から10年が経ったわけです。双日誕生後、一時期の混乱、それからリーマンショック、更には東日本大震災、そして税制改正による繰延べ税金資産の大幅な取り崩しによる赤字決算などなど大きな波が幾つも双日を襲ってきました。私共は当初から財務体質の健全化を旗印に、この10年間で必死になって頑張って参りましたが、最近では社外、あるいは金融機関などから、双日の財務体質に対する全般的評価は大きく上がってきております。では、次の10年は、ということでございますが、次の10年は、収益力を上げ、稼ぐ力を大きく伸ばすことがターゲットでございます。これをキッチリと仕上げて、50年、100年続く会社にしたいと役職員一同願っておりますので、皆様方の更なるご支援をお願いしたいと思います。

最後になりましたが、お集まりの皆様のご健勝とニチメン東京社友会の益々の発展を祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。どうも有難うございました。

## 第9回ニチメン東京社友会総会・懇親会 開催報告

世話人 倉 持 次 雄

2014年7月10日（木）、会場を双日㈱本社21階大会議室として開催した。

これまで新年会で二度ほど利用していた会場ゆえ、会員の皆さんも慣れたもので、開場前から続々と集まって来ておられた。

★ 第一部 2014年度総会、定刻正午に始まり、議事次第は次の通り：

議 長 長谷川 洋 （当会副会長）

1. 開会挨拶 島崎 京一 （当会会長）
2. 来賓ご挨拶 茂木 良夫 （双日㈱代表取締役副社長）
3. 物故者への黙祷 議長の発声で 30秒間
4. 総会議事

(1) 承認事項

- ① 2013年度 事業報告・会計報告 世話人 榊山 俊次  
(資料配布済み。別項掲載の通り)
- ② ①に関わる監査報告 監事 中原 正紀  
(適正に処理されている、と報告)
- ③ 2014年度 事業計画・予算案報告 世話人 榊山 俊次  
(資料配布済み。別項掲載の通り)

以上①②③、一括承認の議長要請に応じ、満場一致で承認された。

(2) 報告事項

議長より以下の2点が報告され、異議なく了承された。

- ① 空席だった副会長の選任： 倉又則夫（世話人代表兼務）  
長谷川洋（世話人兼務）
- ② 監事の交替： 辞任 廣田雄太郎  
後任 大山 弘雄

閉 会 午後0時25分

★ 引き続き、第二部 懇親会に移行：

1. 「乾杯の儀」： 三分一克美さんの乾杯で、静かだった場内は一気に賑やかになった。
2. 会は、塚本世話人の総合司会と小堀裕子さんアシスタントMCの進行で和やかに進んだ。
3. 途中、既に恒例の「あしなが育英会」寄付金をお願いし、沢山の募金が集まった。
4. 終了時刻があっという間に来て、倉又副会長の「中締め」一本締めでお開きとした。

(以上)

## ◎ 2014年7月10日（木）開催 総会・懇親会出席者リスト

[50音順、敬称略]

|                                                                                                               |   |   |   |   |   |   |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|---|---|---|---|---|
| マ                                                                                                             | ミ | ム | モ | ヤ | ヨ | ワ |
| [ 双日関係ご来賓 ]<br>原茂谷此込濱花田武丸山平高西土鈴青<br>木口田山塚井中井田田井濱村橋木木<br>良真哲雅純正 正 龍 昭讓聡<br>[ 支援者(非会員) ]<br>小今増六 堀井川反 裕恵恵真 子子子子 |   |   |   |   |   |   |

|                                                      |                                                    |                                                     |                                                    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|------------------------------------------------------|----------------------------------------------------|-----------------------------------------------------|----------------------------------------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 義一也治久昭晃司徳勝一久宏子治能啓平郎治喜行一郎英紀郎子郎弘男弘三男覚洋郎勇恭弘人一雄郎也孝明二彦代務雄 | 京哲好佳忠 宏正 亨恒允秀宏可眞孝賢慎啓政舜十宣正憲和捷武照 松定 和榮信正義絃幹雄昌 直昭良典 登 | 谷崎石浦本藤山我原尾木木瀬田間内尻中田川木根尾川谷原島川部田村村野本爪川澤生口 本岡田本尾富原合 田間 | 洪島白杉杉須陶曾大高高高高高竹田田津利豊豊中中中中名滑南西西庭野橋長花埴浜林林久廣廣廣深福福星堀本本 | ス | ソ | タ | ツ | ト | ナ | ニ | ノ | ハ | ヒ | フ | ホ |
| 彦道子廣浩保雄夫昭明長利生三勇良治作雄男夫次治彦司雄博勲巳彦三子雄明二夫雄彌介幸子治司一三智雄次美郷実  | 正重信 博安隆英通 克海隆 悦禎啓弘岩睦賢良正泰英正 正寿省奈幸弘貞則次久斉靖厚啓良潤悦 鐵統克美  | 井倉 利永川藤村田野木北保崎西野場森山島村野西森田沢田西畑本池津川城保又持田林林藤井井井藤藤藤藤一塚田 | 浅朝東甘池石伊今岩上宇大大大大大大岡奥小河数勝金金川川川菊木北金久倉倉栗小小近坂坂桜佐佐佐三篠柴   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |

(以上 146名)



ニチメン東京社友会総会  
懇親会風景



乾杯の音頭、三分一克美さん



収支報告：梶山世話人



監査報告：中原監事

## 2014年6月30日現在 ニチメン東京社友会 収支報告書

## 収入の部

前月末

|           | 実行額累計     | 当月発生   | 当月累計実績    | 予算        |
|-----------|-----------|--------|-----------|-----------|
| 1 年会費     | 1,578,000 | 6,000  | 1,584,000 | 1,700,000 |
| 内、12年度会費  | 36,000    |        | 36,000    |           |
| 2 双日本社助成金 | 2,300,000 | 0      | 2,300,000 | 2,300,000 |
| 3 寄付金     | 12,000    | 46,000 | 58,000    | 0         |
| 4 その他     | 343       |        | 343       | 0         |
| ① 金利      | 内訳<br>343 |        | 内訳<br>343 |           |
| ② 雑収入     | 0         |        | 0         |           |
| 計         | 3,890,343 | 52,000 | 3,942,343 | 4,000,000 |

## 支出の部

前月末

|                                                                         | 実行額累計     | 当月発生    | 当月累計実績    | 予算        |
|-------------------------------------------------------------------------|-----------|---------|-----------|-----------|
| 1 総会開催                                                                  | 789,745   | 19,110  | 808,855   | 900,000   |
| 受付謝礼 12,000円 資料印刷 2,646円ほか<br>如水会館 993,184円<br>会員よりの懇親会会費収入 246,000円 相殺 |           |         |           |           |
| 2 新年会開催                                                                 | 627,989   |         | 627,989   | 600,000   |
| 3 会報・名簿発行                                                               | 625,105   | 378,994 | 1,004,099 | 800,000   |
| 4 HPの運営                                                                 | 102,855   | 1,900   | 104,755   | 400,000   |
| 5 会員慶弔                                                                  | 306,109   | 15,522  | 321,631   | 500,000   |
| 6 世話人会運営                                                                | 323,756   | 2,480   | 326,236   | 300,000   |
| 7 事務所運営                                                                 | 717,382   | 61,326  | 778,708   | 850,000   |
| 8 予備費（雑費）                                                               | 120,067   |         | 120,067   | 100,000   |
| 計                                                                       | 3,613,008 | 479,332 | 4,092,340 | 4,450,000 |

## 繰越金の部

|              |           |           |           |           |
|--------------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 当期差引残高       | 277,335   | - 427,332 | - 149,997 | - 450,000 |
| 前期末繰越金       | 2,133,035 |           | 2,133,035 | 2,133,035 |
| 当期末繰越金残高     | 2,410,370 | - 427,332 | 1,983,038 | 1,683,035 |
| (預かり金)       |           |           |           |           |
| 14年度年会費前納分   | 177,000   | 498,000   | 675,000   |           |
| 15年度年会費前納分   | 15,000    | 18,000    | 33,000    |           |
| 16年度年会費前納分   | 6,000     |           | 6,000     |           |
| 次年度助成金       | 575,000   |           | 575,000   |           |
| 臨時預り金（懇親会費）  | 0         |           | 0         |           |
| 東日本大震災義捐金預かり | 0         | 0         | 0         |           |
| 次年度以降預かり金残高  | 773,000   |           | 1,289,000 |           |
| 繰越金合計        | 3,183,370 | - 427,332 | 3,272,038 |           |

# 2014年度事業計画 及び 収支予算

(期間：2014年7月1日～2015年6月30日)

## ニチメン東京社友会

### I. 事業計画

|                           | 予算 (千円) | 前期実績 (千円) |
|---------------------------|---------|-----------|
| 第9回 総会・懇親会開催 (2014年7月11日) | 700     | 808       |
| 会報・名簿の発行                  | 800     | 1,004     |
| ・会報のみの発行を予定しています。         |         |           |
| ホームページの運用                 | 350     | 104       |
| 第8回 新年会開催                 | 700     | 627       |
| 慶弔行事                      | 500     | 321       |
| 長寿者表彰予定者 9名               |         |           |

### II. 収支予算

#### A) 収入の部

|          |       |       |
|----------|-------|-------|
| 1. 会 費   | 1,600 | 1,584 |
| 2. 双日助成金 | 2,300 | 2,300 |
| 3. 寄 付   | 0     | 58    |
| 4. そ の 他 | 0     | 0     |
| 合 計      | 3,900 | 3,942 |

#### B) 支出の部

|               |       |       |
|---------------|-------|-------|
| 1. 総 会 開 催    | 700   | 808   |
| 2. 新年会開催      | 700   | 627   |
| 3. 会報・会員名簿の作成 | 800   | 1,004 |
| 4. ホームページの運用  | 350   | 104   |
| 5. 会 員 慶 弔    | 500   | 321   |
| 6. 世話人会の運営経費  | 300   | 326   |
| 7. 事務所運営経費    | 850   | 778   |
| 8. 予備費+雑費     | 100   | 120   |
| 合 計           | 4,300 | 4,088 |

#### C) 繰越金及び預り金の部

|           |       |       |
|-----------|-------|-------|
| 当期収支残高    | -400  | -152  |
| 前 期 繰 越 金 | 1,981 | 2,133 |
| 当期末繰越金残高  | 1,581 | 1,981 |
| 次年度以降年会費等 | 0     | 714   |
| 双日次年度助成金  | 0     | 575   |
| 預 り 金 残 高 | 0     | 1,289 |
| 合 計       | 1,581 | 3,270 |



## 2015年度長寿者お祝い対象者リスト

|    |        |        |
|----|--------|--------|
| 白寿 | 1916年生 | 対象者：1名 |
| 米寿 | 1928年生 | 対象者：6名 |

\*白寿（1名）；藤田 一郎

\*米寿（6名）；蟻本 守夫、堀部 義数、高間 宏治、伊藤 安雄、中村 昌義、伊達 邦雄

[illegible]

## 報 訃

(平成26年6月1日～26年11月30日)

※印は非会員

## ニチメン東京社友会

| N O | 氏 名      | 出身部門 | 死亡年月        | 享 年 |
|-----|----------|------|-------------|-----|
| 1   | 久 下 真 司  | 食 料  | 2014年07月08日 | 56歳 |
| 2   | 池 田 格    | 化 工  | 2014年07月15日 | 82歳 |
| 3   | 西 田 啓 一  | 関連事業 | 2014年07月24日 | 90歳 |
| 4   | 高 瀬 善 男  | 機 械  | 2014年08月29日 | 86歳 |
| 5   | ※渡 辺 正 治 | 織 維  | 2014年09月04日 | 71歳 |
| 6   | 田 中 稔 昭  | 化 工  | 2014年09月08日 | 71歳 |
| 7   | 青 木 敏 昭  | 鉄 鋼  | 2014年09月19日 | 75歳 |
| 8   | 新 藤 邦 子  | 人 総  | 2014年10月11日 | 73歳 |
| 9   | 清 水 栄 俊  | 管 理  | 2014年10月06日 | 87歳 |
| 10  | 鈴 木 邦 治  | 石 油  | 2014年11月04日 | 94歳 |
| 11  | 杉 村 靖 夫  | 機 械  | 2014年11月10日 | 67歳 |
| 12  | ※片 瀬 肇   | 鉄 貿  | 2014年11月18日 | 88歳 |

ニチメン大阪社友会

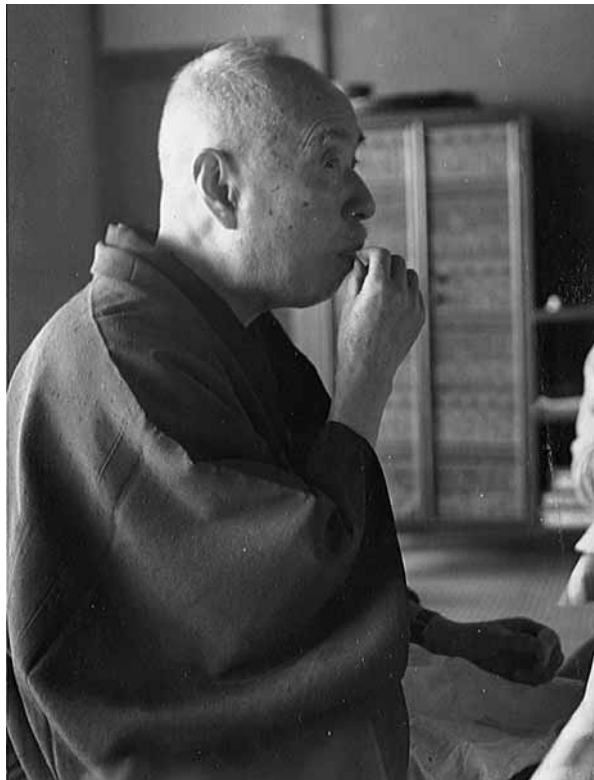
| N O | 氏 名      | 出身部門 | 死亡年月        | 享 年 |
|-----|----------|------|-------------|-----|
| 1   | 喜 多 高 弘  | 食 料  | 2014年02月20月 | 82歳 |
| 2   | 寺 田 東太郎  | 織 維  | 2014年03月29日 | 76歳 |
| 3   | ※下 野 一 雄 | 織 維  | 2014年05月20日 | 65歳 |
| 4   | 高 畠 正 博  | 鉄 鋼  | 2014年06月15日 | 78歳 |
| 5   | 宮 本 義 文  | 通 信  | 2014年06月15日 | 90歳 |
| 6   | 播 磨 進    | 鉄 鋼  | 2014年07月03日 | 79歳 |
| 7   | 笹 岡 英三郎  | 財 務  | 2014年07月28日 | 79歳 |
| 8   | 坂 上 行 男  | 機 械  | 2014年10月12日 | 79歳 |
| 9   | 小 森 治 生  | 福岡支店 | 2014年10月09日 | 87歳 |
| 10  | ※水 野 昭 義 | 合 樹  | 2014年11月02日 | 75歳 |

ご冥福を、お祈りいたします。合掌

## 会員寄稿文

## 祖父高濱虚子と私

高 木 亨 一



晩年の虚子

## 祖父の思い出

高濱の祖父には、私たち家族の地方住まいが長く、親しく接する時間も短かったのと、祖父を取り巻く俳人の方々が先生々と敬う姿や、母をはじめとする叔父叔母がお父さんおとうさんとたえず敬愛をもって接している様子を見るにつけ、私は子供心にある距離を感じていた。祖父もまた孫たちにどのように接したらよいのか迷っていたのではなかろうか。

慶応高校に合格したことを報告に伺った時のことである。祖父と祖母と私の三人だけだったと記憶するが、「慶応に受かりました」と報告したところ、あの優しい顔で微笑みながら、「慶応ですか良く頑張りましたね、遊惰に流れないように。」と言い、祖母には何か目くばせをされた。祖母はハイハイとお祝い袋を出しながら、私の方を見やると「亨一はこれでなかなか頭の良い子ですよ。」などと言ってくれた。

ところでそのときの私には祖父の言葉「ユダ」の意味も漢字も不明だったが、とてもその場で祖父に聞き返す雰囲気にはあらず、礼を述べるやそ

そくさと逃げ帰ったことを今でも鮮明に思い出す。後になって初めて「ユダ」をワープロで打ったところ「遊惰」という漢字が出てきた。大辞林によると、「仕事もせずにぶらぶらすること」とある。「仕事」を「勉強」と置き換えると、まさに先見の明鋭き祖父であった。脱帽というほかはない。

ところで家に帰ってから熨斗袋の中身を開けて見たところ、たしか三千円入っていたと思う。今の価値に直せば五万円ほどにもなるのではなかろうか。

数少ない祖父の思い出のなかでも、強烈に脳裏に焼き付いているのは祖父とのお別れの光景と、そのとき握った手のやわらかさであった。

昭和三十四年、私が大学二年生の四月、原の台に居た母から祖父危篤、すぐ来るようにとの電話を受け兄弟三人で急ぎ向かってみると、祖父は居間に寝かされ、大勢の身内が周りを取り囲み、白衣の老医師が祖父の右手の脈を神妙な顔つきで見ている。全てが異様な雰囲気であった。

私は祖父の枕元に呼ばれ、「お父さん亨一です」という母の言葉に祖父は薄目を開けわずかに頷いたような気がした。私は人間の死というものに初めて直面して、「亨一です」と言うのが精いっぱいであった。握った祖父の左手が小さくやわらかだったことが忘れられない。

祖父の顔をこれほど近くで見たのはこれが最初で最後であった。私はご尊顔を拝しているうちに、「遊惰に流れるな」という祖父の言葉が再び聞こえたような気がした。

## 祖父から祖母に宛てた手紙

余談になるが、先に鎌倉に来ていた祖父が祖母を呼び寄せるために明治三十六年に書かれた手紙が、なぜかこの我が家にあつたのである。祖父の几帳面な一面が見え隠れしているので、ここにそのまま原文をご紹介します。達筆なのか乱筆なのか解説不能な箇所が多いので、高濱家の孫のなかでも最長老格の真下盛二夫妻にご協力いただいたものを下記してみます。

{封筒の宛先} 東京麹町区富士見町 俳書堂書肆

《消印》明治三十六年六月 (三銭)

{差出人} 相州鎌倉長谷 三橋旅館 高濱 清

(註: 虚子の実名、尚三橋旅館は当時鎌倉最大手の旅館で、今の長谷通りから海岸まで広大な敷地を持ち、貸別荘もいくつかあったという)

{本文}

「下村から未だ絵は来っていないか。まだなれば『ズアンイソギタノム タカハマ マツ ヤマシ イデブチマチ 一ノ……(註: この部分不明)』と打電下さい。遊びに来られるなれば、マサ(註: 虚子長女の真砂子)とトシ(同長男の年尾)の普段着と腰巻を用意されたく、波につかって遊ぶには必要に存じ候。子供の遊びは極めて妙に候、天気の良い日を見計らいお出なさるべく。たけし(註: 池内たけし)は未だ一度も連れて出た事なければたけしを同道なさるべく。先日兄上様の手紙に編輯が済んだら遊びに行こうかなどと……(註: 以下幾文字か解読不能) よく兄上様とご相談なさるべく候。

三時間かかって、(註: 大船經由鎌倉までの所要時間を指すか)

午前 七時四十五分 新橋発  
八時三十分  
十時三十分  
十一時三十分  
十二時三十分

午後尚沢山出る、四番目のステーション大船駅にて乗り換えその次がすぐ、鎌倉なり。賃金五十一銭(註: 現在料金は八百円とか)新橋にて鎌倉までの切符を売る。二時間ばかり前までの報知あらば大船駅まで迎えに出てもよろしい。前日までに何時の汽車に乗ると決めてご通知あらば尚よい。九時三十分位のが丁度良いかもしれず、丁度ひるに宿につくべし。

六月二十九日

いと殿 清  
兄上殿 文次郎君によく相談して決めなさい。」  
以上。

因みに明治二十二年横須賀線「大船—横須賀」間開通。当時鎌倉から東京に通勤していた者のなかで著名人としては祖父が最初だったらしい。

## 俳句と私

祖父は仕事を兼ねて叔父叔母をつれちよくちよく私たち家族のもと(わが父親の転勤先)に来られたものだ。が、正直なところこれは私にとっては苦痛のタネであった。なぜならこの時「家族句会」と称して身内の句会が催されるのが習わしで、ここに必ず私も参加させられたものであった。さらにはまたこれは小学校五、六年生の青森在住の頃だったが、地元の俳人を中心とした母(註: 俳人晴子)主催の句会が度々自宅で開催されていた。こういう時私はと言えば友達を呼んで遊ぶこともできず、ただひたすら静かにしているほかはなかったから、遊び盛りの子にとって苦痛以外のなものでもなかったのである。そのためか気がつくと私は、俳句も俳人も俳句会も、こと俳句にかかわるもの全てが、自分から母を奪う敵と認識するようになっていた。俳句にかまけている母親の姿への反抗であったようにも思う。

昭和二十七年、青森から戻り鎌倉の御成中学校に一年の途中から入学した。由比ヶ浜の自宅から徒歩二分と近く、正門(校門)は昔の武家屋敷の門構えのように立派なかまえて、左の門柱には祖父の直筆で「鎌倉市立御成小学校」、右には「鎌倉市立御成中学校」と書かれた、三メートルほどの立て看板(表札)があった。現在は中学校が移転したため小学校のものだけとなっている。

これは当時御成小学校に通っていたいとこの美子(現姓松田)が学校から依頼を受け、これを祖父が引き受けたものと聞いている。以前比叡山で高濱家のいとこの初也さんに会ったときのことが、彼にその話をしたら「なぜかその『失敗作』が私の家に今も在りますよ」と祖父の筆跡を茶化すのかのように笑いながら言っていた。思えば私たちいとは毎日祖父の直筆を見ながら通学していたことになる。

そんな中学校時代の苦々しい思い出話だが、二年生のときの国語の試験問題で俳句と作者をむすぶ出題があったとき、不覚にも祖父に関する箇所だけ間違ってしまったことがある。学校の成績ならいつも上位にいたつもりだが、このときばかりは国語の先生に冷やかされたものである。母が知りでもしたら私は勘当ものだったろう。それ以来俳句はやらないという私の言い訳の一つとしている。

そうした俳句嫌いな私にも、数は少ないが祖父から褒めていただいた俳句の思い出がないわけではない。

秋風に ぶつかってゆく 子供かな 亭一

これは昭和二十五年、青森に居たときの家族句会での句だが、祖父に大変褒められて「ホトトギス」誌にも載ったものだ。

それにもう一つ、父が日銀金沢支店長だった頃、私は金沢には同行せず東京で下宿をしていたが、それでも学校の休みには金沢に呼ばれて半ば悶々としていた時の話である。例によって家族句会が催されたのは、いとこの記録によれば昭和三十二年四月だった。祖父の他出席者には真砂子叔母、立子叔母、泰叔父それに我が父母などの名前がみえる。そのとき私の詠んだ春眠の一句に、祖父をはじめとする賛同者が多かったという記憶が今に残る。

春眠も したし町にも 出てみたし 亭一

参考までに、そのときの虚子とわが母晴子の句をいくつか拾ってみれば、

起き抜けの 気むずかしさよ 花の雨 虚子  
咲き満ちし 花に風ある お寺かな 晴子  
唯一心と 額あり春昼 小暗けり 晴子

とまれ、祖父は家族句会のたびに「俳句は自然体で写生が出来た時に良い物ができる。難しい言葉を駆使した言葉の遊びにならぬように」と繰り返し話されていた。とりわけ「自然」と「写生」という言葉が印象的であった。

### 比叡山延暦寺

平成十六年三月二十五日のことであつた。比叡山延暦寺滋賀院にて、高濱家代々の供養が当時の渡辺座主猊下の肝いりで行われた。前々から高濱家の初也さんから出席を促され、私も高木家を代表して出席したときのことである。本堂での法要は天台の総本山にふさわしく荘厳を極め、その時九十五歳とは思えぬ力強く威厳のある御座主の読経に、私は心底感銘をうけたものだ。

高濱 清（虚子）・いとをはじめてとして、母晴子をふくむ祖父母所生の子女も全員この時すでに鬼籍の人となっていたから、供養会の出席者は高濱家の初也夫妻をはじめとする、虚子からすれば孫とひ孫をふくむ身内の総勢十人だった。

その渡辺御座主から昼食の席で承ったお話が忘れられない。それによると昭和十六年延暦寺が大火に見舞われて再建に苦慮していたとき、旅行中にそれを聞きつけた祖父から当時の金で三千円の寄付を賜った。お蔭で延暦寺再興の大きな助けとなったのだという。

延暦寺としては、この恩に報いるべく祖父をはじめとする高濱家一族の永代供養を執り行うこととし、生前の祖父と相談の結果、祖父の父の命日三月二十五日をその日と決めた。これが供養会の始まりだが、今となつては高濱家でも虚子ご夫妻をはじめ子女の代もみな故人となり、寺の方でも虚子と面識がありこのような趣旨を理解しているのも、九十五歳になる自分だけとなつてしまった。しかしこうして今虚子の孫子の方々の参加を得たことを感謝している旨、畏れ多いお言葉を賜ったものである。

卑近な話にわたるが、当時の三千円というのは今にしてどのくらいの値打ちのものか、後になつて‘せこい’根性丸出して私が調べて見た所では、四百八十五万円ぐらいにはのぼるかもしれないと出た。延暦寺にとつてもはした金ではなかったものとみえる。

昼食の後、私は御座主にご挨拶をかねて、生前の母晴子がお世話になつたお礼を申し上げると、「晴子さんには大変お世話になつた。私の句碑の除幕式にもわざわざお越し願ひ感謝しています。いつも来られるたびに言いたいことを言つて帰られる元気な人でしたね、私は好きでしたよ。」などと仰つた。

帰り際御座主にはあらためてお礼を述べて玄関を出ると、目の前に大きな石の句碑があつた。祖父を心から尊敬し師と仰いでいた母が、この石碑の前で御座主に向かって偉そうにしている姿が目につくようであつた。

思い起こせば、すでに多くの方々が故人となられ滋賀院での供養の対象になられている。あの世ではまた皆が集まつて家族句会でも催しているに違いない。いずれ自分もあの世に参ることは時間の問題にしても、そのときまた‘家族句会’で苦手の俳句を作らされるかと思うとぞっとする。‘苦界’を逃れる手立てはないものか今さらながら困つたことではある。

(おわり)

## 歌集「風の回廊」をよむ

長 谷 川 洋

まず歌集『風の回廊』は、会員・大建雄志郎さんの歌集である。ニチメンを退職してから短歌を本格的にはじめられたようだが、この歌集には、66歳から74歳までにつくった438首が収録されている。

本来、歌心もなく、詩歌には全く無縁な私が大建さんの短歌に気がついたのは、今年四月、日経新聞の短歌欄に、そのお名前を発見した時である。

ある人に聞いたところ、大建さんの名声は、既に、知る人ぞ知る存在だった。

全国紙・地方紙への投稿で、2005、2009、2011、2013；日経新聞年間秀作集に選ばれる。

2008、2010 神奈川新聞社短歌年間賞、受賞。

ロシア、英国駐在時代の見聞による短歌はもとより、同氏の所謂 ERUDITION に根付いた思惟に満ちた作品も多い。438首から選ぶこと自体、私には所詮無理な話だが、無理を承知で、以下、ご紹介します。

~~~~~ \* ~~~~~

- ◎ 削ぎ落とし筋骨のみなるチェーホフの散文の簡 短歌にぞ似る
- ◎ 花は地に落ちしあとから本物と或る画家の言葉忘れがたしも
- ◎ 日輪にわが影つくる力なく白夜の街のわれはまぼろし
- ◎ 就職しすぐに赴任のモスクウなりき 時に思ほゆ深くおもほゆ
- ◎ 饒舌も才能なりとドストエフスキー書簡集読みつっ思い深まる
- ◎ チェーホフの「かもめ」観る日に古びたる全集取り出し十回めを読む
- ◎ 低く暮らし高く思ふとワーズワースが唱ひしごとく生きたかりしを
- ◎ もしあらば奇しき素性を語るのかミロのヴィーナス左右の腕先
- ◎ ターナーの「曳かれ行ゆく廃船」目の前に己を重ねしばしただずむ
- ◎ 半世紀前支社あり勤めし「近三ビル」神田に残る煉瓦色のまま
- ◎ 企業戦士と揶揄されたるが幸せと今にし思ふそれもなき世に
- ◎ 同期会のさみしき流れ解散の皆立ち去りしあとの駅頭
- ◎ けふかぎり座することなき椅子机 最後のメール送信キー押す
- ◎ ネクタイに用なくなりしわれが見る向かつ席なる男のヘルメス
- ◎ 人件費抑えにおさへしわが経営 辞めし人らのその後を思う

以 上

## インド雑感－6

高 尾 勝

6月7日成田発1200、タイ航空に搭乗し盤谷で乗換え、インド時間21:25にBombay着。Nariman Point所在のTrident Hotel (Old Oberoiが改名) に投宿す。

今回の訪印目的はBombayの名家のひとつMirani Family (綿花商Khimji Visram & Sons) の跡取り息子の結婚式参加の為。ニチメンが日岩との合併に際し、合弁会社India Gelatin & Chemical Co., Ltd. (IGCL) の持株を放出したので、残念ながら双日はKVSグループと取引一切なし

6月8日(日)、晴れ

Nariman PointからTaj Mahal Hotel, Gate of India所在地まで往復約1時間半散歩、Monsoonが近いので湿気があり、気温も33-34度、汗びっしょりの散歩はMumbaiテロ後遺症を見て回る結果になったので、当該テロと影響を素描すると；

2008年11月26日夜、パキスタンLashkar-e-Toibaのテロリスト12名がゴムボートでインド門近辺に上陸、目と鼻の先にあるTaj Mahal Hotelに本隊が突入、分隊がNariman Point所在のOberoi Hotelなどの襲撃に分散した。分隊は当夜警官隊に射殺されたが、Taj Mahal Hotelを占拠した銃と手榴弾で武装の本隊は市街戦しながらに部屋から部屋と警官隊と四日間に亘って交戦。本事件で166名死亡、293名負傷。米・英・豪人など外国人の被害も出たが多くは地元インド人。Taj Mahal Hotelは火災と破壊で数年後に漸く復旧。



Taj Mahal Hotel

Trident Hotelもテロ攻撃に曝されて以来、車寄せの入り口・出口は嚴重な扉と番人が配備されているし、State Bank of Indiaの本店所在地は勿論、他の銀行所在地も歩道と車道の境目は車が簡単には突破できないような頑丈な鉄杭で仕切られ、歩道と銀行敷地の間も金網フェンスが巡らされている。加えて銀行正面玄関に通じる場所には数名の警官が屯しState Bank of Indiaの場所には装甲車も駐車していた。

テロの後遺症か、と頷きながらGate of India所在広場に向かったら、Gate of India広場の入口に金属探知機を設置した警官屯所があり、探知機を潜らないと広場に行けない仕組みになっていた。Taj Mahal Hotelは金網で広場と遮断されており、一旦広場から出て迂回する必要がある。広場の美観を損なうこと甚だしいがこれも後遺症。日曜日のせいか欧米人の観光客を含め大勢が広場に押しかけていた。

6月9日(月) 曇天、気温は昨日に較べ下がっているが、湿気が増している。

11:30 Trident Hotelからone blockの距離に在るKVSを訪問し、花婿の父親KVSの当主Nayan C. Miraniと面談、Nayanの一人息子Tanmayの結婚祝品とMirani一族への土産を手交。一旦ホテルに戻り、13:00 KVSを再訪して役員食堂でサンドウィッチとマンゴジュースの軽食を摂る。三井銀行は住友銀行との合併前に歴史を誇るBombay支店を閉鎖し、KVSとの合弁金融会社からも手を引いたが、三井住友はKVSとの合弁復活することになるだろうとのこと。

昼食後、同じビルの7Fに在るIndia Gelatinを訪れ、昨晚紐育から戻ったVC Mirani社長{Nayanの次弟}、会社設立以来の番頭Kapadia、と談笑。IGCLはGelatinとその中間生成物Osseinを市販しており、用途は写真・食品・製薬だがコニカとニチメンが手を引いてからフィルム分野では富士フィルムが主顧客になっている。製品の40%が米国向け、35%が欧州、25%が日本と泰。因みに富士フィルムは米国と蘭に工場所在。残念ながら、IGCLに関し双日のfunction余地なし。

尚、1972年に設立したIGCLは、一般公募分の中からニチメンの現地職員にも株式を割当ててやり Calcutta 支店責任者の Mr Hazra、Bombay 支店は Mr Shankar など4人がRs. 100-200 出資したが、株式額面Rs. 10が再三の倍額無償増資などで株数が23倍になり、1990年前後には株価はRs. 1, 250にまで上昇した優良企業で、ニチメンの彼等が金持ちになった裏話がある。

19:00 Trident Hotel B 1 の Regal Room がパーティー会場。例によって定刻1時間あまりのち、8時ごろから来客が続々、花婿・花嫁とその両親兄弟姉妹が壇上に並んで親しい来客一人一人の祝福を受けた。私は新郎・新婦に「早く Baby を作ってくれたら、お祝いに再訪できる、Mirani 一族5代を知ることになる」と要望した。米国からの Nayan の末弟 Rahul (故CH Mirani の三男)、CH 未亡人、NR 未亡人と娘、KR Mirani など Mirani 一族の主だった人々が勢ぞろい、来客は Bombay の上流階級と思しき人々延約1, 500人、美人も多く婦人達の衣装も煌びやかだった。因みに、日本からは、私と神戸在住のインド人男性が夫人(日



花婿(TANMAY N. MIRANI)と花嫁及び嫁側の家族



NR未亡人・娘と高尾



CHの次男VIRENの嫁

本女性) 同伴で参加。

CHの次男坊VCの結婚式は三日間続き、三井銀行末松謙一社長(当時)も出席されたことを想い出す、時代の流れか結婚式もかなり簡略化したように思える。パーティーは夜半まで続くので、私は午後10時頃退散した。

6月10日(火) Bombay 発14:00発の Jet Airways で Delhi 着16:05、友人中嶋敬二氏(元住商インド社長)の出迎えて、日本人経営の Avalon Hotel に投宿。場所は空港と Grugaon の中間地。

6月11日(水) 晴れ、

Delhi 日本婦人ボランティア・グループ代表 松下まゆみさんと10時にホテルで一時間半談笑、4月訪印時にゆっくり話が出来なかったので失地回復。ボランティア・グループはダージリンの紅茶マカイバリを一手に扱っている石井さんと協力して若干頂く頒布手数料、婦人たちの手芸品頒布、などで年間30万ルピー(約50万円)を捻出してボランティア資金に充当している由で日本からの支援金は大いに助かるとのことだった。医療機関の設備購入補助或いは精薄児施設への援助などを行っているが、先方がインド政府や自治体に働きかけをするように仕向けなければ百年河清を俟つ結果になるので、ボランティアとしての限度判断も難しい、と述懐しておられた。7月に彼女が約ひと月間一時帰国するので日本での再会を約した。因みに松下さんのご主人は双日の駐在員で、2001-07年デリー勤務、今回の駐在は3年目、従い松下まゆみさんもインドのベテラン。

11時過ぎ中嶋敬二氏がホテルに来訪、Manesar 工業団地内に彼が3月に開業した日本料理店

Manami（愛味）を初めて訪れる。5年前にプラスチック用金型製造会社経営の為に呼寄せた娘さんご夫婦も金型会社は日本人工場長に任せて立上期の日本料理店運営に転じて、ご夫婦を含めコックなど5人の日本人が従業しており、かなりの初期投資をした60席の立派な店。Manesarには日本人が約300名、彼等が想定客で漸く口こみで知れわたり将来の目途も付いてきた由。昼の仕出し弁当配達を依頼すべく想定しているインド人姉・弟が来訪しての話合いに同席した。この姉・弟は東京居住経験者で日本語も達者だった。

この日午後は気温52度を記録した由、デリー駐在時代45-46度でもゴルフをしたが、50度を超えると暑さの次元が全く異なり、肌が痛くなる。6月8日の週はインド人も吃驚の高温で地球規模の気候変化を実感した。

午前中中島氏とデリー市内に向かい、Sundernagar に Mittal Store を訪れ紅茶を購入して昼食時間にホテルに戻り、昼食後中島氏と別れる。

20:00中島氏差回しの車で空港に向かい、23:30のタイ航空に搭乗、盤谷で乗換えて帰国。

中島氏と私の共通の知人O氏がJetroの新興国専門家として富山県のアルミダイキャスト・メーカー社長を伴って在Manesar、従業員3, 200人のASK Automotive (P) Ltdと技術提携交渉中の席に応援団として二人が4時頃から約2時間途中参加した。夜は中島邸で麻雀を楽しむ。中島夫人は小学校2年生の孫娘に日本での体験入学を経験させるべく孫娘と一時帰国中の由、体験入学は楽しいようだが、算数の場合インドでは2年生で分

## 国民性(エートス)と国民感情(パトス)について(その二)

「儒教」と「易姓革命」

中国大陸の「エートス」というべきものは何なのか、非才な私の身に余るテーマではある。しかし前号に見てきたようにヨーロッパ大陸に因んで言えば、ドイツにも英国にも、その代表的な思想のなかに国民性の顕著な存在は知ることにはできた。今それを中国大陸に見ようとすれば、私の考えでは中国人的エートスと認めうるものが、二つの思想のなかに見て取れるのである。一つは言わずと知れた「儒教」、もう一つのものは「易姓革命」の思想である。

仏教についていえば、これが西域を通じて中国に伝来して以来、中国社会に及ぼしてきた影響力には計り知れないものがあるだろう。しかしそれが中国人のエートスを形成するほどかといえば、日本の場合についても同じことが言えそうだが、大きな疑問符がつく。というわけでこの際仏教のこと

と」とされる。なるほど「易姓」とは文字通り名前(姓)が易わる(変わる)こと、「革命」とは天命が革まる(あらたまる)ことであって、まさしく天命による王朝交代の思想そのものであったのである。

もともとこの思想にいう革命方式は、伝説上の堯・舜時代を範とした王朝の「禪譲」だったされるが、どうやらそれは後知恵というものだろう。実際はといえば秦の始皇帝にはじまり、近代の清朝にまでいたる大陸二千年(伝説上の堯・舜時代に遡れば三千年以上)の、10指にあまる王朝交代劇を見るまでもない、その歴史に禪譲というような生易しい易姓革命が行われたためしはなかった。現実のものは須らく「放伐」と呼ばれた暴力装置に依拠したことは、現代の中国革命にも生々しいのである。

因みに「革命」という言葉だが、言うまでもないがこれは英語の「revolution」の訳語である。これを「革命」と訳したのは中国人なのか日本人なのか知らないが、見事な訳者のセンスに驚くほかはない。今日なら易姓革命にいう革命も、ロシア革命やフランス革命のそれも、まったく共通の理解で足りるのは有難いことである。

とまれ、英語のrevolutionについて私は大変興味深いことに気づかされる。今頃恥ずかしいことだがこの単語revolutionには革命のほかに、もう一つの意味、それは天文学にいう「公転」があり、もともとこの言葉の原義が「回転」だったことを思い出したのだ。そしてあらためて大陸の「易姓革命」の歴史が意味するところのものと不思議な符号に気がついたのである。

秦の始皇帝にはじまり、あえていえば現代の中華人民共和国に至るまでの、あまた歴代王朝の易姓革命の歴史は、まさに繰り返しくりかえし回転(公転)して止まない、魔性の輪廻のような歴史ではないか。その車の両輪がもしかして「儒教と易姓革命」の思想ではなかったかと。

ここまで書き綴ってきた私にもつくづく思うところがある。それはあれだけの革命を成し遂げながらも、年の端もゆかぬ紅衛兵まで駆り立て、「造反有理」を唱えながらさらなる革命の仕上げにと狂走した毛沢東のことであった。私はあらためてこの現代の大革命家のなかにも歴代連綿として受け継がれてきたと思われる、大陸三千年のエー

トスを一層確かなものとして感じ入っている。

またもう一つ私の感慨を付記したい。それは「万世一系」などという大仰な言葉はともかくとして、皇朝継承の正当性というならば、我が国もヨーロッパ大陸においても血統が第一条件であることに違いはなかった。ところがすでに見てきたように中国においてはそれが「天命」であり、そのcriteria(マイナス基準)とするところは「徳」の有無であった。

中華人民共和国が今後直面する最大のアポリアもまた、私がこれまで述べてきたこのような大陸伝来のエートスと無縁であることは免れないであろう。

むろん現代の中国共産党が歴代皇朝の後継であるはずもないが、一党支配というこの一点にかぎってみれば、「易姓革命」という大時代的な魔性の思想が、今も依り憑く可能性は排除しがたいのである。今日「天命」の天は「国民」と置き換えてよく、「徳」はこれを制御しようとするれば「法」の出番を待つほかはないが、歴代一党支配の大陸ではそれ自身が時の「法」であり、その法はまた一党の恣意であったから、「司法」の支配といった概念すら及ばないのではないか。大陸には魔性の思想が今もひそむ所以であろう。

此処まで私は「儒教と易姓革命」の思想に中国人のエートスを尋ねてきたつもりだが、考えて見るとこの思想をもってエートスとするには、茫洋たる中国に対して単純にすぎるうらみが残る。私が求めてきた各国のエートスも夫々の国の歴史や思想の中であった。その傳でいえば中国人のエートスについても、おそらくは紀元前5世紀前後の春秋・戦国時代に勃興した諸子百家の思弁、つまりあの百花繚乱の思想の全体像のなかにもっと根源的なものが隠されているかもしれない。

とまれ、これらかつての中國大陸の骨太な思弁の力は到底日本人の及ぶところではない。ここにあって「儒教」と「易姓革命」を取り出したのは、現代中国がよもやこれまでの歴代王朝の轍を踏むことなどあるまいと思いつつも、易姓革命再来の危険ゆえであることを付記しておきたい。

そして更にもうひとつ、思想としての易姓革命が大陸から日本にどのようにして伝えられてきたか、興味あるテーマの一端としてここに少しく書き留めておきたいことがある。

ごく最近松本健一という思想家の著した「『孟子』の革命思想と日本」によれば、孟子の思想の核心は革命論、つまり易姓革命論だという。「孔孟」といえば抱き合わせの体制教学そのもの、つまり儒教の代名詞ぐらいにしか教えられて来なかった私のような非学の者にとっては驚きであった。

この著者によれば孔子は権力者に重用されてきたが、孟子は時として権力者に隠されてきたのだという。なるほど孟子の危険思想が故意に隠されてきたのは大陸もさることながら、むしろ日本の権力者たちによるものだったのだ。古来革命は日本人の忌み嫌ってきたものと言えようから、こうした革命思想が我が国に流入することの危険に、この国の歴史が異常に神経をとがらしてきたことは想像に難くない。

権力者たちは国の統治思想として「論語」を顕教、「孟子」を密教のごとく別して扱い、孟子の思想の危険部分は隠べい・抹殺に努め、なによりも真先に講じた現実的な手段が、天皇の名前から「姓」を抹消することだったろう。もともとが「姓」がないところに「易姓」は起こりようがないからである。

著者は古代日本の歴史の中でいつ誰がこのような機巧を用いたのか、たぶん藤原不比等ではないかと推察している。神威の源泉として天皇を擁する権力者たちが、万世一系の原点と国家の安全保障を天皇の「無姓」に求めたとしても不思議はない。中国大陆と日本列島と彼我の国民性を思うとき、易姓革命の意味するところの違いにあらためて感嘆を禁じ得ないのである。

#### 日本人的エートス「無宗教・無思想性」と古代ローマについて

前号で私はこの国のエートスを「天皇制」に求めたものだが、万世一系などとは言わぬまでもこれが邪馬台国にまでさかのぼりうるとするなら、皇家の血統の継承は1,700年以上にもわたる。それ自体が皇室の霊威となりエートスの源泉とも見なされようが、私は今別のことを考えている。

これまで私はドイツ、英国そして中国に例をとりながら、それぞれの国の思想と哲学のなかにエートス（国民性）を探し出そうとしてきた。それはそれで目的に叶った方法だと考えてきたが、さてこの国（日本）のことになるとうまく当てはまらないのである。その理由はほかでもない、この国には日本所生のものといえるような骨太な思想の系譜が見当たらないからだ。

仏教があるではないかという人がいるかもしれないが、これは外来のものである。むろん仏教伝来この方およそ千五百年にもわたる歴史のなかで、日本人がこの宗教の受容に見せた「無常と虚無」の思想の中に、顕著な日本人的エートスが認められないことはない。しかしより日本的にしてより根源的と思われるエートス（国民性）というならば、畢竟するにそれこそ古来の「無宗教・無思想性」そのものではないかという思いに至る。

思いついたのはそれだけではなかった。実はたった今私はコペルニクス級の大発見をしたとでもいうような気分になっている。司馬遼太郎さんが折にふれては日本人の無思想を婉曲にはあるが慨嘆し、時には「無思想の思想性」というごとき発想の転換で、世界中に「無思想」の日本の良さを売り込めないものかなどと苦し紛れな提案を申されていたことを思い出したのだ。

そして司馬さんも気がつかなかったような私の歴史発見とは何かといえば以下の通りである。世界の歴史上に近代までかつて国家と目された国々の中で、この日本のように「無思想・無宗教」の国があったらどうか、あったとすればどこの国であろうか？

それがなんと一例だけまことに貴重な存在に思いあたるのである。それこそ「古代ローマ帝国」だったのではないかということ。多くの先人がこのことに気づかなかったのは無理もないことではある。古代ローマといえば思想も神々もあふればかりだったからであろう。

それがなぜ「無宗教・無思想」といえるのか、思想はといえはなるほど氾濫状態といっても過言ではなかったが、一言でいえば須らくギリシャ哲学の借り物だけで手いっぱいだったのではないか。それに並外れて現実的で政治的だった古代ローマ人は、ギリシャ人と違って自前の哲学や思想など形而上学的な世界の創出に関心はなかったといえる。従ってその隆盛期にはキケロとかセネカといった大物思想家を輩出することはあっても、世界史的な思想の系譜といったものが見当たらないのである。

四世紀末になってキリスト教が国教化されるまで、神々にしても数ならば人の数ほども、主神ユピテル（ジュピター）をはじめとする神話の世界の無邪気な多神はひしめいていたが、唯一神（絶対神）や教義・経典が存在したためしはない。これを多神教と呼ぶことはできても宗教とはいわな

いのは、日本人が森羅万象に神が宿るとしながらも、唯一の神（絶対神）を戴こうとはしなかった私の謂う「汎神論的無宗教」に似ている。

私はここに明治維新时期から敗戦に至るまでの大日本帝国と、それより二千年もさかのぼる古代ローマ帝国との、国民性の比較論をやろうとしているわけではない。しかし今私がこのように時代を隔てた両帝国のエートスの共通項として「無宗教・無思想性」をあげ連ねるには理由がある。

もとより共通とはいっても事實は、片や古代ローマ人がふんだんな神々と思想のなかにありながら、それらのものから概ね「自由」であった（時代により皇帝によっては、キリスト教に対する過酷な迫害・弾圧は認められるが）。これに対して日本人はといえば文字通り宗教も思想も、特段の自前のものは持ち合わせて来なかった、ということと言えるだろう。

要すれば古代ローマ人は宗教や哲学といった形而上学的な世界に対するには現実的で政治的でありすぎたし、古来日本人も無常や虚無といった仏教的な悲観論的哲学を除けば、世俗と現実こそ常に宗教や思想に優先してきた。このところが時代を隔てながらも両帝国に私が見た共通の「無宗教・無思想性」である。

### 閑話寸隙

古代ローマの歴史が読者に感動を与えてやまないのは、ひとつにはイエス・キリストにはじまる西暦の紀元が奇しくも古代ローマの帝政がはじまる皇帝アウグストスの治世の時期に符号することである。この時期市民の最高神と目されていたローマの三大主神の一つユピテル（ジュピター）は天空の「木星」に由来した。

それは西暦前7年のことだったが、この木星が星空の魚座の中で794年に一度だけめぐって来るとされた土星との異常接近が、この年の夏と秋に観測されている。このことも古くからバビロニアの天文台を通じてあらかじめ正確に予測され、ローマやアレクサンドリアには告知されていたのだ。

こうして、片やローマ市民は皇帝アウグストスを木星・ユピテルと仰いで人格神と祀り、かたやユダヤ人はイエスの誕生を終末期のメシアの到来と信じた。ここに世界史的な政治と宗教の実際的なはじまりがあったと思われる。

さて私は先に見てふんだんな神々と思想の

なかに、事實はローマ人の無宗教・無思想性を指摘した。ここではさらにローマ人の国家祭祀にふれて、われわれ日本人自身の途方もない無宗教・無思想性との共通性を考察してみたい。

国家の危急であれ戦勝記念の凱旋式であれ、古代ローマの国家祭祀はローマの華のように目に映る。そこで祀られる神々はローマにとって有益と考えられる限り何でもよかったが、中でも天空神と目されたユピテル、ローマの祖先神と思われるクイリヌス、それに戦争の神マース（マルスとも）、以上が三大主神と呼ばれる国家祭祀の中心的な神々であった。これらの神々のなかには、時として上述の皇帝アウグストスのような人格神として認められる者も加わったが、皇帝であっても祀られるのは神々のなかの one of them としてであって、決して唯一神（絶対神）ではなかったことは、ここに特筆しなければならない。これが私の謂わんとする古代ローマにおける国家祭祀の中の「多神教的無宗教」である。

ローマの国家祭祀といえば、わが国の皇室祭祀などでは見ることのできないもう一つの興味深い特徴がある。それはこの祭祀の中心が「供犠」（いけにえを捧げる）にあることだ。こうした供犠の目的は「神々」に生贄の血を捧げることによって所期の恩恵を得ることにある。なかにはこの行為を「等価交換的」と断言してはばからない歴史学者もいる。これを日本の神々にあてはめて考えて見れば、何ということはない、「現世利益」（ごりやく）にほかならないのである。

このことは上述した三大主神のうちの戦争の神「マース」（マルスとも）を例に取ってみても歴然としている。古代ローマの「やみくも」な富の源泉は地中海交易と外征による戦利品（略奪と奴隷を含む）だったから、戦争に勝つということはローマの支配階級だった有産市民最大の関心事といえた。戦神マースが三主神の一角を占めていたのは、外征が常在戦場だった市民にとっては戦勝が等価交換以上の現世利益であったからにほかならない。わが国の皇室祭祀ならさしずめ、こちらは「かぼそい」富の源泉だった「五穀豊穡」などに見られる「ごりやく」がこれに相当するのである。

繰り返すがこの双方の「宗教」には教義・経典といったものはなかったし、宇宙の根本原理的な真理や道徳が説かれた形跡もない。確かなことは「あくなき」現実主義があったことである。

もう一つ、日本人の「無宗教・無思想性」をい

うとき付け加えたいことがある。それは自前のものが無かったとはいっても、もちろん宗教〔哲学〕や思想が無かったということではない。それどころか歴史的に見ても、自前のものが無いだけ一層切実に、哲学や思想にたいする止みがたい飢餓意識や好奇心がかきたてられたものと思われる。明治維新期の文明開化がそうだったし、古くは命がけの遣唐使の例を引くまでもない。哲学や思想に限らず広く世界文明への強烈な希求は、より解放的な古代ローマの地中海世界の比ではなかったにしても、四海に隔絶された海洋国家の日本国民にとって自然なものであったろう。

日本人のエートス（国民性）を考えると、私が「無宗教・無思想性」を挙げてこれを良質のものと論じるのは、絶対神や絶対化された思想からの自由（解放）がいかに人間社会の平和や進展に寄与するものか、そしてその逆にそうした絶対思想にからめとられたときには、その社会を待ち受ける運命が崩壊しかありえないという歴史の教訓に触れたかったからである。古代ローマが経験した「パクス・ロマーナ」（ローマの平和）や明治維新の「文明開化」がその例であった。

片やローマ帝国の衰退はキリスト教が公認され国教化された時点と重なり合い、やがて西ローマ帝国（476）の滅亡につながる。片や大日本帝国も明治憲法による天皇神格化が、統帥権（大時代的な謂いとして帷幄上奏権）の暴走を許し、国民を無謀な戦争に駆り立て無惨な敗北をもたらした。

両帝国は時代こそ遠い隔たりはありこそすれ、それぞれに良質と思われるエートス（無宗教・無思想性）がもたらした帝国の興隆は、畢竟するに宗教（神）の手によってふいに帰したように思える。無論ここに敢えて断り書きを付しておかねばならない。ローマ帝国の衰亡は少なくともキリスト教興隆の原因ではあったが、その結果だったのかどうか。少なくともキリスト教国教化をもつても、帝国の衰亡は防ぎえなかったことだけは歴史的事実だが。

ペリー提督の浦賀入港からおよそ半世紀後の日・ロ戦争の頃だったろうか、司馬さんが問題にするのもこのあたりからのことである。

司馬遼太郎氏はその著作のそこかしこで、日・ロ戦争から太平洋戦争にいたる約40年間を、日本歴史始まって以来の「厄災」だとして慨嘆している。またその主な原因が天皇の神格化と軍部の錦の御旗、「統帥権」にあったと指弾される。私はいつも

読むだけで言いようのない嘆息を禁じえないくらいである。

因みに古代ローマ帝国はまさに多神教ゆえに、戴く皇帝の神格化は仮令これを認めることはあっても、他の神々との相対化のなかでのことであつたのに対し、この国ではあろうことか近代に入ってからである、天皇の神格化つまりは現人神（絶対神）の創出という、古代ローマの帝政時代にも考えられなかった禁じ手を侵してしまうことになる。「神聖ローマ帝国」にあって、長く君臨したハプスブルク家の皇帝たちにさえ、神格を認められた者など誰もいなかったことが思い起こされる。

ここにもう一つの感懐を綴っておきたい。それはヒトラーによるドイツ帝国崩壊のことである。古代ローマ帝国のエピゴーネンをもって鳴らした千年の神聖ローマ帝国、そのまた後裔と自認したビスマルクのドイツ第二帝国、それらを経てヒトラーのドイツ第三帝国を崩壊に導いたものに、もしドイツ的エートスがあるとすればそれは何だったのだろう。

そして私はふたたび思い至る。あのヒトラーのナチズムが己の暴力装置正当化の理論武装に利用したと言われる、ニーチェの「力への意志」（「ツァラトゥストラはかく語りき」）とかハイデガーの「先駆的な決意性」（「存在と時間」）などといった哲学のことである。ドイツはどこまで行っても形而上学的で観念論的であることを免れなかった。それは遠く古代ローマ的な「無宗教・無思想性」といった良質のエートスとも無縁のものであったことは確かなことである。

戦後まもない頃だったか、思想界に左翼系の学生運動家の間で人気のあった羽仁五郎という学者がいた。その彼がさる政治家との対談の中でその理論を批判されたとき、「理論は武器だ」と反論しているのをテレビの画面で見ていた当時の私は、奇妙に感心したことを今でも鮮明に覚えている。思えばあれからかれこれ半世紀以上を経る。あの当時の「思想」はただ輝かしく真理のように見えたものだが、今から思うに、その理論も人間を指し洗脳するための「武器」か道具以上の何物でもなかったのではないか。「無宗教・無思想」が良質な取り柄と思うゆえんである。

（次号に続く）

## 「我が過ぎ去りし日々と余生」

渋谷 義

どうやら平凡な人生で終わりそうだが、光陰矢の如しである。来年4月半ばには、80歳になる。幸い大病はなく過ぎてきたが、最近は少々血圧も高く、寝つかれないことも多く、降圧剤と睡眠薬を服用している。

趣味は多く、ゴルフは50年に及ぶが、一昨年春で終えた。房総カントリーでは、月例で優勝、40-39のスコアだった。

社交ダンスは、南部先生に習って14年半になる。丁寧な教え方であるが、年のせいか覚えが悪くなった。横浜は社交ダンス会場が多く、たびたび踊りに行く。

朝日カルチャーで斉藤先生のエッセイ教室も同じ位になるが、先生も高齢で昨年引退された。人気の講座であった。エッセイのお蔭で、我が人生の様々な経験や思い出を書くことができた。エッセイ集「赤いペン」が手元に6号～15号までである。11号には「私は雌猫ソフイー」の題で、22年余も生きた愛猫を書いた。獣医さんから「人間で言いえ、120歳位だね」と言われた。

他には「歌で歩くみなと横浜」「夢見る江戸時代に生きる」「断捨離への挑戦」「笑う門に福来たる」「葬式」(16歳で夭折した姉や父母のことを書いた)「平和ボケの日本」「苦しい時の神頼み」「忘れがたい人」(タクシー会社の武さんを主に書き、カラオケ上手な武さんのお蔭でカラオケ店のママだったダンスの南部先生に会えた。)  
「私のアキレス腱」「諺・名言に学ぶ」「人生で大事なことは何か」「あのときのこと」(我が人生を顧みて様々な事を記してみた)「雪の思い出(内外での様々な経験を書いた)」「諺・名言に学ぶ」「横浜と私」「我が故郷の方言」「日本の将来、期待と不安」など。

日記を26年も付けているので、過去の経験や思い出をかなり正確に記すことができる。比国と米国の海外駐在経験もネタになる。海外旅行も「英仏37泊」や台湾、中国、ベトナム、エジプトなど

の経験もネタになる。

俳句、川柳、短歌などにも親しんできた。

「粗大ゴミ朝出したのに夜戻り」

「携帯の電話名から天国へ旅立つ友の削除も哀し」

「花吹雪浴びて登るや桜道」

「ひばりの墓に唄上手を祈る」

「その人はスターと言われ献花に埋まる」

土方さんの返歌である。毎年桜の季節にひばりの墓にお参りしている。

「ときめきが動悸にかわる古稀の恋」

「カラオケで美声を聴かせて入れ歯落ち」

「グルメなしのおおるり旅行でダイエット」

「尾瀬沼の夏を彩る水芭蕉」

尾瀬には三回訪ねた。

「携帯の電話名から天国へ旅立つ友の削除も哀し」

「3時間待つて病名加齢です」

「カード増え暗証番号裏に書き」

「景色より トイレが気になる 観光地」など

囲碁も長年親しんでいるが、上達は遅々たるもの。長生きもよいが、90歳位でボケないで、ピンコロと昇天したいものだ。

以上

## 福 富 直 明

## 1. 登場人物の名前

作家が自作の登場人物に名前をつけるとき、独自のパターンがあるはずだ。多作の人だと、同じ名前をうっかり二度使うこともあるだろうし、長編五部作で、治男が途中で治夫になっているのを見かけたこともある。

以前に自分の本に書いたので、繰返しになるが、エド・マクベインは、多作にもかかわらず、同姓同名を二度使ったことはないという自信があったようだ。

ところが、当人は気づいていなかったが、アリスという女が何度も登場した。しかも、殺人犯だったり、殺人の共犯者、強盗の女房、不倫女性、違法の手術を行なう女医、連続強盗殺人犯のアリスなど、社会的に善良とは言えぬ女が多い。だから、作者の意識下に、アリスという女性に対して何かこだわりがあるのではないかと当人に訊ねてみた。全然思い当たらないと言ってから、そう言えば、12歳のときに恋をした女の子がアリスだった、遠くに住んでいたから、自転車で出かけて、家の近くに張り込んで、出てこないかなと思ったものだという。この恋は実るどころか、アリスは彼の存在すら知らなかったとか。いかにも12歳らしい話だった。

そんな会話を交わしてから7年後に発表した作品に、警部が12歳のときにカナリアを飼っていて、アリスと名付けたが間もなく死んでしまったという短いエピソードが出てきた。年齢が12歳、名前がアリスとなると、やはり意識下にこだわりがあるように見受けられる。

アリスが悪女なら、アニーはどうだとマクベインが言う。これは彼のシリーズの第43作目が発表されたころの会話で、その時点では14人のアリスが登場していた。さて、アニーはと調べてみたらここでは、アン、アンナ、アニータなども愛称の場合はアニーになるので、アニーとして数えたがなんと19人も登場する。驚いたのは、殺人事件の被害者となったアリスは一人もいないのに、アニーは19人のうち、5人が殺されているのだ。

マクベインのシリーズは、第56作まで続いたが、43作以降、アリスはぱったり登場しなくなった。他方、アニーはその後も7人登場し、そのうちの1人は射殺され、もう1人は空巢の被害に遭っているのだから、アニーたちの受難は依然として続いている。

アリスがワルなら、アニーはどうだと言ったとき、マクベインは何を考えていたのか、なぜ、即座にアニーの名を思い浮かべたのかなと不思議に思う。

ちなみに、彼が20歳代で結婚した最初の夫人の名は……。

## 2. 消えた文豪日記

若い頃編集者だった友人がいる。久しぶりに会い、インド料理屋で食事をしているときに、明治40年代から昭和にかけて活躍した文豪の思い出を聞かせてくれた。原稿を受け取りに出入りするうちに夫人や令嬢とも親しくなり、文豪が早朝に亡くなった日、ニュースで知って、かけつけたのが午前9時頃。夫人に言われるままに、文豪の額にそっと手を当ててみると、まだ温かったという。

文豪の没後、一年ほどしてから夫人が「実は日記が主人の亡くなったあと、気付きましたら書斎から消えていたのですよ」と彼にそっと語り、彼は愕然とした。文豪を敬愛し、しかも編集者という仕事なのだから、文豪の日記はそれこそどこから手が出るほどほしかった。

まず頭に浮かんだのは、C社の仕業かなという疑問だった。C社は文豪のほとんどの作品を出版してきたし、文豪が上京するときの列車の指定席やホテル、グルメだった文豪の好んだ料理屋の手配などを取りしきって、他社の介入を排除していたから、第1容疑者とみなされても当然だった。

文豪の日記は少年時代から始まっていたと言われるので、文学史だけでなく、戦前から戦中、戦後の時代史としての価値も測り知れない。亡くなったのは79歳。1日に何行のあるいは何ページの日記をつけておられたのか知る由もないが、文豪はメモや資料を紙のサイズに合わせて作らせ

た木箱や段ボール箱に保存していたとのことで、ほぼ70年間の日記帳と言え、百数十冊か二百冊、段ボール箱なら3箱を超える量になると思われる。ミステリ小説的に見ると、これだけの大きさのものを、よそのお宅の書斎から、遺族の気付かぬうちに運び出すのは並大抵のことではない。数冊だけ持ち出したのなら、日頃出入りしている人物の仕業だとしぼられてきて、私の友人も容疑者のリストに入ってくる。

友人は、夫人の話し方が秘密めいていたという印象を受けている。その後、ある評論家がこの日記紛失の話を雑誌に書いたので、彼は、この人にも話しておられたのかと思った。文豪の令嬢と会った機会に訊ねてみると、「ええ、一冊残らず無くなってしまったのです。母がそのことをお話したのですね」と聞き返された。令嬢の言葉には、彼が紛失を知っているのに驚いたような響きがあり、夫人が日記紛失の事実をごく限られた人たちにしか語っていなかったことを暗示しているように見える。

文豪の没後、40年余り経っているが、いまだに日記は発見されていない。持ち出したのが、仮にC社だったとしたら、文豪の担当で名編集長として知られた人も、当時のC社の社長もすでに死亡している。C社の社屋のどこかに封印されたままなのか、それとも忘れられているのかも知れない。

文豪にはかなり複雑な家庭事情もあったから、夫人自身が日記を隠した可能性も捨てきれないという。だが、夫人は、文豪の仕事の理解に役立つものならという建て前論の人だったとのことだし、公表したくないなら、公表しませんとはっきり発言して、追求をかわす手もあった。自分で隠しておいて、「消えていた」と秘密めかして説明していたのだとしたら、よくよく複雑な事情があったのだろうと推測される。夫人もすでに亡くなっており、日記の紛失は謎のままである。

著作権の保護期間の50年もあと数年で切れる。いつか、どこから突然出版されるのだろうか。

実は、上記の拙文は10年ほど前に日本推理作家協会の月報に寄稿したものだが、ちょっと面白い話題なので転載させていただく。文中では、文豪を囲い込んでいた出版社が日記を持ち出したのではないかといった容疑にもふれたので、文豪の名

前は伏せた。ところが、最近インターネットでこの文豪のことを読んでいたら、私の書いた上記の文章が参考資料として載っているのが驚いた。文豪の名前を伏せておいたにもかかわらず、だ。どうやらこの消えた文豪日記は以前にも文壇の話題になった事件らしい。あと一、二年で文豪の著作権は切れる。どこから出版されるのか。膨大な量の日記帳が文豪のお宅から消えたことを考えると、こっそり持ち出されたというよりは、文豪自身が出版社に渡したと解釈するのが、一番合理的かも知れない。

社友会会報の前号に「ミステリ小説断想」を載せて戴いた。編集責任の長谷川さんには、事前にゲラを見せて下さるようお願いしておいたのだが、いろいろ手違いがあつてゲラのチェックはせずに掲載され、読んでみたら、誤植が8箇所あり、参った。ミステリ・マガジンという雑誌は一時期誤植が多く、編集長自らがミスプリ・マガジンと自虐的にいっていたのを思い出した。いまさらあらためて訂正する事もないと思うが、初めてモスクワに行くのが、快適な初夏か、極寒の冬かによって“ソ連観”が変わってくると教えてくれた駐在員のことを書いたら、“ソ連観”が“ソ連感”になっている。こういう誤植は、私の漢字能力を疑われる恐れがあるので困る。それから、カサブランカの最低気温は-2.7度ではなく、12.7度です。また、題名の同じ文芸作品が結構あるという話の中で、ミルトンの1667年の『失樂園』と同題の（渡邊淳一の）小説があると冗談のつもりで書いたら、1667年が1967年になってしまつて、冗談は不発に終わった。

誤植に関しては、面白い昔話がある。植字工の不注意で起きる誤植が余りに多いので頭にきた作家が「私の抗議（protest）」という論説をかいた。印刷して出来上がってきたのが「私のprostate（前立腺）」になっていたという。

## 平成26年度ニチメン大阪社友会総会、懇親会に参加して

園 山 春 一

9月10日大阪の“太閤園”にて開催された掲題の会にたまたま関西に滞在していたので参加いたしました。当日の出席者数は125名程度であったと記憶しております。現在の大阪社友会の会員総数は604名とのことでした(設立時は712名)。その社友会を役員19名の方々が年2回の懇親会を中心とし、下記する各種事業を実施し会の運営にあつたておられるとのことでした。

さて、当日慣れない大阪の中心にある太閤園に11時ごろ到着し、幾人かの懐かしい方々と挨拶をしていると総会の案内があり、会計報告や事業計画などを聞く機会に恵まれましたが、東京に比較し事業内容が豊富かつ多岐にわたっていることが印象に残りました。囲碁、ウォーキング、ゴルフ、写真、絵画などですが、こうした活動が立派に見事に運営されていることを知ると役員の方々の努力に頭が下がる思いをいたしました。(特に私自

身が東京の世話人会役員を辞退したこともあって反省を込めての感想です)。もう一点ご報告せねばならないのは、大阪社友会の皆様の結束力を基にした会を活気あふれたものにしようとする意志が強く感じられました。それは旧ニチメンという会社の関西における存在感からくるのではないかと感じた次第です。

勿論、何十年ぶりの出会いとそれに伴う懐古談義の楽しかったことは皆様のご想像の通りで遠く離れたところでの会に参加した大きな喜びでした。東京の社友会会員の皆様も機会あればぜひ大阪社友会に参加されることをお勧めいたします。

大阪社友会の今後のさらなる発展と会員の皆様のご健康を祈りつつ当日暖かく迎え下さった大阪社友会の皆様に本紙面を借りて改めて深謝申し上げます。



総 会 風 景

## ニチメン・アーカイブス = ARCHIVES =

## ◎ ニチメン湘南会ゴルフ会;1995 ◎

丸 山 泰 三

2014年も早くも終わらんとしている。年齢の所為か、近年、時の流れが特に速く感じる。  
したがって、過去はどんどん押しやられ 茫々となっていく感じだ。

先日、写真を整理していたら 懐かしい写真が見つかった。急に往時が蘇った感じだ。

ニチメン湘南会ゴルフの時の当時のメンバーの集合写真。

故安藤幸男さん（元副社長）を始祖とする湘南会ゴルフ・コンペ、1995年7月21日の記念写真だ。

安藤さん亡き後は、野村喜久雄さんが重鎮として会を物心両面で支援された。

故人となられた方々も居られ、なんとも懐かしい写真だ。

岩田さん、宮部さん、高畑さん、高木秀明さん、都築さん、すでに幽明界を異にされた。

ゴルフの後のパーティーで、「もう病気には勝てない“皆さん、さよなら”」と手を挙げて去って行った宮部さん！” 本当に、不帰の人になってしまった。

宮部さん、優勝したとき、カップを持って微笑む写真が、「月刊ニチメン」に載った時はご機嫌だった。

20年前の写真、みな若々しい。懐かしい写真、茲許、ご覧下さい。



【前列 左から】丸山泰三、中原 誠紀、北村 俊夫、高畑 政徳、安藤 幸男、大西 勇、  
【後列 左から】大村 譲、宮部 斉之、野村喜久雄、長谷川洋、高木 秀明、岩田 昭二、  
水庫 博夫、吉川 秀夫、都築 基夫。（敬称略）

## 「私のブログ」から2題

大 山 弘 雄

○月○日

「孫と登った高尾山」～おみくじの効用？

♪ 孫娘（小1）が泊まりがけで遊びに来たので初めてという高尾山へ連れ出した。

日曜日ということもあり沢山の人で賑わっていたが、気温も20℃前後に保たれていて

快適そのもの、絶好の行楽日和であった。

♪ 山頂駅へはケーブル車で6分程度、簡単に到達できるのだが、そのあとが急な階段や坂道が待っていて幼児には少し厳しい箇所が幾つかある。TVで見たことのある芸能人が階段を上って行く様子を撮影している放送局の一行にも出会った。

♪ さる山では数十頭のニホンザルが飼育されていて芸らしきものも見せてくれる。毛繕いはいくつかの群れが別々にやっていて、それをしてもらっている猿がいかにも気持ち良さそうに寝そべっていて実にほほえましい。

♪ 薬王院から上りの坂道を20分程度で富士山が遠望できる展望台へ行くことが出来るが孫の体力も考え今回は取りやめに決定。途中の茶店ではお団子や新鮮な胡瓜の丸かじりを試食する。薬王院のおみくじは孫が「吉」、私が引いたのは「イゴキチ」（ネット上の私のニックネーム）ならぬ「大吉」であった。

♪ 陽はまだ高かったが早めの下山を決める。登山口駅周辺の土産物店をのぞいているときに、突然、孫がカバンがないと言い出した。カバンといってもいわゆる「ポシェット」で中にはお年玉の残りやSUICA（カード）、登山記念の硬貨などが入っている大切なもので

今にも泣き出しそうな顔をしている。

♪ 慌てて問いただすと、どうやら下山のケーブル電車に乗る前に立ち寄った茶店のトイレに置き忘れてきた可能性大。連れ添っていた家内の不注意を叱っても今更仕方のないことなので駅の窓口

に事情を説明し山頂の茶店に照会してもらうことにする。

♪ 結果は「大吉」！ 茶店の方でも持ち主を探していたのだが、駅の方へ届けてくれ、次の便で我々が待っている麓の駅へ降ろしてくれるという。駅の窓口では、山頂まで探しに行こうとケーブル電車の切符まで買い求めていた分をすぐ払い戻してくれた。ポシェットを届けてくれた女性駅員の姿がまるで天女のように見え、お礼を何度も繰り返した。

十数年前のイタリア旅行でカメラをなくした時のことを思い出しながら、ああ、日本は良い国！

♪ ふと気がついてその場でおみくじを取り出してみた。なんと！孫の引いたおみくじの「失せ物」の項に「近くにあり 出る」と書いてあるではないか！高尾山薬王院のご霊験あらたか！一方「大吉」の私の方は「失せ物 出ず 遅ければなし」となっている。逆でなくてホントに良かった！

△月△日

「知床旅情」考

♪ オカリナ仲間とときどき地元の老人介護施設などを訪問してボランティア演奏をすることがあるが、今度、演奏の合間に「知床旅情」（森繁久彌 作詞・作曲）を男声コーラスで歌うことになった。最初は楽器演奏のみの予定で気楽に考えていたのだが、ご指導頂いている先生の鶴の一声とあっては観念せざるを得ない。

♪ この歌は有名なだけに聞き慣れてはいるのだが、いざ自分の声で楽譜通りに歌わなければならないとなれば自己流は通用せず、つい身構えてしまいそうである。気になったのは歌詞の一節が自分の記憶している順番と異なっていることを発見したことである。

♪ 2番の歌詞の後半に「今宵こそ君を 抱きしめんと 岩陰によれば ピリカが笑う」となっている部分があるが、先生から頂いた楽譜には、こ

の箇所は「君を 今宵こそ 抱きしめんと岩陰によれば ピリカが笑う」となっている。

♪ どちらでも大差ないではないかと言われそうだが、歌う立場になれば、日頃 鼻歌で歌い慣れている方がやはりしっくりとくる。家に帰って二つの楽譜集を調べてみると、どちらも自分の記憶と一致して「今宵こそ君を・・・」となっていたので一安心。

♪ しめしめ、これで先生にこちらの正当性を納得させられそうと喜んだのだが、ふっと原作者の森繁久彌はどのように表現しているのかが気になった。さっそく“YouTube”で探してみるとなんと 森繁久彌ご本人が歌っている動画が見つかった！

♪ 視聴結果は 期待を裏切り、先生の楽譜と同じように歌っているではないか。これは参った！しかし ここであきらめるわけには行かないと思い直した。この歌が有名になったのは 加藤登紀子が歌ってからである・・・とすれば 彼女はどのように歌っているのか？

♪ 同じく“YouTube”で調べた結果は、今度は 期待に応えるものであり、自分が記憶していた通りであった。これはいかに解釈すべきであろうか。私の自己流の解釈は「どちらも正しい」となる。即ち、原曲は森繁久彌が作ったのだから、勿論それで正しいのだが、後日、加藤登紀子が森繁の許可を得て自分が歌いやすいように順番を変えたのであろうという推理である。となれば、こちらも正しいということになる。

♪ 仮に森繁久彌の了解なしに加藤登紀子が歌詞を変えて歌っていれば、原作者としては黙っていないはずだから、当然 了解があったに違いないというのが私の合理的？推論である。それとも加藤登紀子の歌がヒットして印税が森繁久彌にも入ってきていたので、細かいことは目をつぶろうと歌詞の変更は黙認したのだろうか。

♪ ついでにこの両者の歌を聞きくらべていたら、3 番の歌詞でも相違点が見つかった。

冒頭の「別れの日は来た」に続く部分で森繁久彌は「知床の村にも」と歌っているのだが

加藤登紀子は「羅臼の村にも」と続いている。これは歌詞の順番が入れ替わったのとは全く異なり、歌詞そのものが変更されている。やはり、森繁久彌と加藤登紀子は この変更について話し合い、お互いに納得していたに違いない・・・と考えた次第。

♪ ついでだが、「ピリカが笑う」の「ピリカ」とは何ぞや？ 調べてみると「ピリカ」とはアイヌ語で「美しい」という意味だそうで、この歌詞の場面では「美しい娘」のこと、即ち「君」が笑う・・・と言っているのだという説と「エトピリカ」という可愛い声で鳴く鳥のことだという説などもあるようで解釈が分かれているらしい。

♪ 倍賞千恵子が この森繁の曲を歌っているので“YouTube”で調べてみると、こちらは「オホーツクの舟歌」となっていて、旋律は「知床旅情」と同じだが、歌詞は全く別物であることが分かった。しかし、歌詞は大変美しくバックコーラス付きで歌う倍賞千恵子の熱唱は大変素晴らしい。

♪ 横道にそれたが、自分が歌う「知床旅情」は加藤登紀子のもののほうがやはり歌いやすいのでみんなと相談して先生に反旗を翻したいとも思うが、高齢化が進んで心臓が弱くなっていることが気がかりである。それに先生の指導が厳しくなっていて、ついて行けなくなっても困るしネ。

(完)





筆 者

## 「イギリス」という国はどこにある?!

浜 地 道 雄

名は体を表す Names and natures do often agree。ビジネス上「相手を知る」のはだいじだが、ことに国名は治政・歴史に直結し、興味深い。

FIFA (Federation International de Football Association) 2014の初戦相手「コートジボアール」。

舌を噛みそうなその名前は Republic of Cote (海岸) d'Ivoire (象牙)。つまりフランス語で、日本名は象牙海岸。

同じく強豪のイラン Iran は広い意味で Arien アーリア (人)。

その愛称、Team Melli のメッリとはペルシャ語で国民を意味する。

同じ中東産油国、回教国ということで混同しがちだが、イランとアラビアは人種が異なるということは留意が必要。

アラビアの強豪は、重大なエネルギー・パートナーである サウディ・アラビア Saudi Arabia。Saud 家 (現王朝名) の Arabia (砂漠の民の意)、つまり、ファミリー国家なのだ。アラビア語には p の発音がなく b となり、JAPAN ジャパン⇒ JABAN ヤバンと発音される。

わが「日本」は (決して野蛮国ではないが)、本来 Nihon ないし Nippon (これを内名ないめい、endonym/autonym という)。それなのに、Japan と外名される。外名 (がいめい exonym) とは、つまり、外部第三者による呼称のこと。

Japan とは、ものの本によれば、福建語でジベンクオ Jih-pen-kuo と呼ばれ、唐代にはクオ「国」を省略してジーペンとしことに由来のよし。

さて、そのサッカーの「発祥国」は「イギリス」。イギリス (アングル人の国の意) はポルトガル語のイングルス Ingles を経て日本に持ち込まれ

た日本独特の呼び名。アングル Anglo とは、彼らの先住地がドイツ北部のシュレスビヒ地方アングル「土地の隅」であったことに由来。総称のブリテンは、先住民ブリトン人「騒々しい人々」に由来。彼らの自称は English で、そこから English, England が派生した。

実は FIFA の「英国代表」は 4 チームだ。イングランド、ウェールズ、スコットランド、+ 北アイルランド。前 3 者はそれぞれ主権国家ではないが、便宜的に「カントリー (国)」とよばれる Countries of the United Kingdom。他方、北アイルランドは「Province (州)」と公式に表現されている。つまり United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland だ。

「イギリス」のこの「4 つの国」の世界最古 (1863) のサッカー協会は、FIFA (創立 1904) への加盟にあたり、「個の主張 (= 他とは違う)」をしたようだ。

なるほど、例えばビジネス相手がスコットランド出身と聞いたら「Oh, Caledonian (スコットランドの古語) !」と言うと、相手の頬はゆるむ。お試しあれ。

では「イングランド」というと、ヨーロッパから移住してきたゲルマン系アングル人の住んでいた土地という意味の「アングリア」から派生した言葉。

要するに、「イギリス」という国は実は存在しないのだ。我々単一島国民 (一応) からすると何とも複雑で、その治世・外交の難しさは想像を絶する。

## 第9回ニチメン機友会開催報告

糸 川 良 平

2005年1月27日にプラント部OB会に端を発する「機友会」も本年ではや10周年を迎え、会場を昨年迄の八重洲富士屋ホテルから「アルカディア市ヶ谷」(私学会館)に移し去る10月18日(土)62名(男性61名、女性1名)の参加を得て開催致しました。

11時半より80歳代から50歳代まで4世代「世代別別集合写真」撮影。余談ですが、80歳代集合写真はご本人以外にも購入される方がおられた様で追加現像となりました。

写真撮影も無事完了、12時定刻に本年度、機友会会長を石澤謙一さんより引き継いで頂いた水庫博夫新会長挨拶で開宴となりました。

水庫新会長挨拶に引き続き、今や機友会にはなくてはならぬマンドリン演奏を引っ張ってこられた与儀治さん(本年2月鬼籍に入られる)のご冥福を祈り全員で黙祷、与儀さん亡き本年度機友会とはなりましたが、別名「与儀さんバンド」メンバー皆様の絶大なるご厚意により本年度も機友会への参加を表明頂き例年にも増したプロフェッショナルなマンドリン演奏で会を盛り上げて頂きました。本当に有難うございました。

乾杯の音頭は当番幹事(東京自動車部・航空機部)代表の廣岡幹雄さん、機友会10周年の祝辞が延べられ、皆で乾杯、会場のあちこちで旧交をあたためあう姿がみられました。苦楽を共にした先輩と後輩、同期の仲間との再会は毎度のことながら時の経過を忘れさせニチメンで働いて良かった、と感じる時でもあるかもしれません。

新会場となった「アルカディア市ヶ谷」はOBの中川十郎さんのご紹介で、場所も市ヶ谷、駅から徒歩数分の非常に便利な場所にあります。初めての会場ではありましたが常任幹事による数度の下見、会場との粘り強い交渉のお蔭で男性7,000円、女性5,000円と従来と同じ会費で今までと遜色ない充実した食事、飲み物のメニューになりました。

さて、宴も佳境となるなか、まず野村喜久雄さんにご挨拶をお願い致しました。野村さんお話しの中に入社間もない頃の北米出張時羽田空港は米軍管理下に置かれていたため正規ゲートではなく裏ゲートから入られたことなど当時のエピソードが披露され改めて商社ニチメンの歴史を肌で感ずることができました。

現役代表で双日オートモービル社長川村安宏さんから現在の商いの取り組み状況などが披露されました。

各世代のざっくばらんな苦労話、自慢話を聞くことでできるのもこの会の楽しみでもあります。今回は現役世代の参加も得ましたが、今後より多くの若手世代に参加頂くことで広範囲な世代のニチメン機械部隊の交流の場になることを期待致します。

いよいよ機友会好例カラオケの部ですが、本年度は今年米寿を迎えられた丸山修作さんによる「千曲川」。格調高い「与儀さんバンド」のマンドリン演奏をバックに歌詞カードを見ずにフルコーラスを熱唱、会場拍手大喝采。引き続き負けじと全員で「青春時代」を合唱、「まさに宴もたけなわ」でしたが中締め時間となり、朝倉重道さんの中締めの挨拶を以て「第10回機友会」も盛会のうちにお開きとなりました。2015年度機友会は下記要領で開催予定です。

開催予定日：2015年10月17日(土)

会 場：アルカディア市ヶ谷 (私学会館)

当 番 幹 事：原動機部

「機友会」をより末永く楽しい会にしていく為にも上述若手世代と女性の方々の参加を是非ともお願い致します。

最後になりますが、当日受付をお手伝い頂きました、増川恵子さん、小堀裕子さん、川村（小柳）紀子さん、丹羽恵理子さん、白川智子さん、内田由美さん、有難うございました。紙面をお借りして御礼申し上げます。有難うございました。

それでは、皆様来年の「機友会」でお会いしましょう。

以上

**第九回機友会 2014年10月18日 土曜日 於:アルカディア市ヶ谷(私学会館)**  
**出席者名簿 当番幹事:東京自動車部/航空機部**

|          |          |          |         |                 |
|----------|----------|----------|---------|-----------------|
| 1 赤澤克夫   | 15 加藤資一  | 29 鈴木淳一  | 43 平川真淳 | 57 森寿朗          |
| 2 朝倉重道   | 16 川西勲   | 30 高木亨一  | 44 廣岡幹雄 | 58 矢野宏明         |
| 3 荒木武雄   | 17 河原均   | 31 高橋要司  | 45 古家章  | 59 山岸正雄         |
| 4 池永浩    | 18 川村安宏  | 32 辰井健   | 46 別城義磨 | 60 山邑陽一         |
| 5 石川信行   | 19 木皿重正  | 33 豊間根政行 | 47 星加恭  | 61 吉本邦晴         |
| 6 石澤謙一   | 20 北川幸雄  | 34 土田博   | 48 保科孝  | 62 舎川(南雲)恭子     |
| 7 伊地知紀仁  | 21 木寺厚二  | 35 殿岡敬久  | 49 細井康男 |                 |
| 8 糸川良平   | 22 倉又則夫  | 36 永井存   | 50 牧洋生  | 受付              |
| 9 伊藤裕郎   | 23 小井沼幹生 | 37 中原正紀  | 51 松尾憲一 | 63 増川恵子(受付)     |
| 10 稲治寿   | 24 五月女穰  | 38 南部捷郎  | 52 丸野純  | 64 小堀裕子(受付)     |
| 11 今村隆夫  | 25 坂田慎一  | 39 野村喜久雄 | 53 丸山修作 | 65 川村(小柳)紀子(受付) |
| 12 大曾根誠  | 26 佐藤鐵雄  | 40 林正弘   | 54 水庫博夫 | 66 丹羽恵理子(受付)    |
| 13 大羽陽一郎 | 27 三分一克美 | 41 林義人   | 55 溝江博三 | 67 白川智子(受付)     |
| 14 岡田賛次郎 | 28 杉本佳久  | 42 久本紘一  | 56 三原均  | 68 内田由美(受付)     |



第9回ニチメン機友会風景



[illegible]

## 第9回FD会について

橋 口 喜 郎

ニチメン東京社友会会報編集責任者の長谷川洋様よりご下命あり掲題会合について偶々幹事の一人として名前のあがった私に会合の概要を紹介せよとのことで、僭越かつ他メンバーに無断ではありますが東京FD会について簡単に紹介いたします。

東京FD会は旧ニチメン東京財務本部の現役 OB、OGの私的な交流会として1990年頃に故太田陽之助様（昭和26年）が仲人をしたメンバー（オタオタ会）がコアとなり発足し（私橋口は関係なし）以後幹事を押し付け合いながら細々と約25年間で9回とそれでも一回に50人から80人を動員して結果約3年に一回開催されており一番最近は本年5月11日にアイビーホール青学会館で昭和23年入社の国領和彦様から平成元年入社の塩路隆太君までFD会が誇る美女6名を含む50名の出席を得て執り行うことが出来ました。（添付写真）

FD会は旧ニチメン東京財務本部および関連子会社旧ニックスに瞬時でも在籍した方々を可能な限り調査し名簿を作成更新し理想年一回（現実3年に一回）パーティ形式で会合し近況を報告し合うこととし特に双日となってからは当時の現役からも社友会年齢未満または社友会非加入者の多くの不本意な転籍者、転職者が出、社内外で連絡が取りづらくなったこともありこういう会合を通じて消息情報交換を行うことの重要性もあるかと思考し当会を続けている次第です。現在名簿登載者数344名 内物故者28名旧ニチメンという縛りの中で平成11年以降数年の入社の方々は私が個人的に日本に居なかった為存じ上げないということで名簿からはずれておりますがいずれにせよ平均年齢は上がる一方です。名簿登載者のうち想定現役満60歳以下は154名、第9回出席者のうち昭和46年以降入社者が27名とこの種会合としてはまだまだ存続可能性はあるのかなと思っております。当会世話人代表は佐藤守男氏（昭36）首席幹事は橋本武和氏（昭43）女性幹事は赤城（平松）枝美さん（昭48）比留間（倉林）玲子さん（昭46）でここ最近はやっております。

以上



美女6名のうち5名（左から岩崎（土井）千晶さん（昭58）、方海（武内）美詠子さん（昭61）山口（大田川）敦子さん（昭61）乙竹（永江）由理さん（昭61）細谷（堀沢）万由美さん（昭60））と最年長国領和彦様（昭23）。あと一人の美女赤城枝美さんは偶々この写真には写っておらずごめんなさい。

自称若手から現役まで。（左から國時昌治（昭54）橋本武和（昭43）田中孝平（昭46）清水武人（昭39）平山純（昭50）乙竹英樹（昭60）宮内秀雄（昭59）住友宣明（昭54）の各氏）



残念ながら全体写真がないので上記いずれも偶々この二枚に写っている方々は幸運（？）なサンプルのようなもので写っていない多数の参加者各位にはご容赦。

## ニチメン東京化工OB会 ＜第24回懇親会＞

栗 田 久 彌

「ニチメン東京化工OB会」が、恒例会場となっている日本橋交差点脇の「レストラン東洋」で、今年は例年の凡そ1ヶ月遅れの11月21日(金)18時より開催されました。本年の参加者は37名で昨年度の28名と比べると大幅な増加でした。

双日が誕生した2003年4月から早や11年有余を経過した現在では、新規ニチメンOBの参入が望めない状況に加え、既存会員の老齢化による不参加の増加が年々加わる等々の諸般の事情から、今年の懇親会は、案内状で「本会は今回を以って一旦解散する」方向を打ち出し、返信用の出欠葉書に「解散の『賛・否・保留』を問うアンケート欄」を設け、結論は「懇親会場で最終方向を決める」と言った意味を含めてのスタートでした。

そのアンケート結果は：

|        |      |      |
|--------|------|------|
| 出状総数：  | 122通 |      |
| 内 解散賛成 | 49通  | 40%  |
| 解散反対   | 8通   | 7%   |
| 意見保留   | 31通  | 25%  |
| 無記載    | 6通   | 5%   |
| 未回答    | 23通  | 19%  |
| 葉書未着   | 5通   | 4%   |
|        | 122通 | 100% |



で、明確に解散に反対の意思を表明された方は僅か7%、大方の方々は解散賛成か意見保留と言った結果でした。

とは言え、今年の懇親会も開宴直前から相変わらずの「ワイワイ、ガヤガヤ」、宴会は活気に満ち溢れた化工OB会独特の雰囲気スタート、お互いに旧交を温め合う有意義なひと時が過ぎて行きました。

そんな中、双日本社並びに双日関係会社の役員を含む人達から、「化工OB会が此の儘消え去って仕舞うのは何としても惜しい、我々が頑張るので引き続き存続して行こうではないか!」と言った意味の思いもよらない発言があり、驚きと共に「会員の元気さと逞しさ」をヒシヒシと感じながら皆んなに諮った処、出席者全員の大拍手を以ってこの申し出は受け入れられ、会の存続が確認されました。

そんな訳で、「化工出身OBは何時迄経っても相変わらず元気浚刺・前向き思考の連中ばかり」を実感しながら、これから化工OB会に少しでもお役に立つ様心掛けなければとの思いを抱かされた一夜でありました。

### ☆参加者名（アイウエオ順敬称略）

|          |       |       |       |       |       |       |
|----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 【男性：31名】 | 青木 政和 | 石原 啓輔 | 大野 久生 | 沖田 隆彦 | 小平愛一郎 | 勝田 泰司 |
| 木村 伸家    | 清田 郁夫 | 栗田 久彌 | 斉藤 至弘 | 篠塚 美郷 | 柴田 実  | 島崎 京一 |
| 鈴木 譲治    | 須藤 忠昭 | 外林 俊浩 | 竹内 可能 | 丹下 薫  | 成見 和男 | 西川 洋  |
| 西村 照男    | 林 悟   | 牧 洋生  | 梶渥 巖夫 | 水野 英幸 | 箕作 武彦 | 山邑 陽一 |
| 吉海 秀造    | 吉木 健  | 吉田 孝生 | 和田順一  |       |       |       |
| 【女性：6名】  | 阿久津恵子 | 五十畑利枝 | 笠原 聖子 | 滑川 和子 | 乃村 恵子 | 浜田 早苗 |
|          |       |       |       |       |       | 以上37名 |

幹事連絡先

合成樹脂関係：吉 木 健  
電 話：03 - 3421 - 9497  
E-mail： yoshiki@fb3.so-net.ne.jp

化学品関係： 栗 田 久 彌  
電 話： 048 - 473 - 3339  
E-mail： kurita138@jcom.home.ne.jp



## 第27回ニチメン如月会(経理部懇親会)開催報告

浅 利 眞 司

恒例のニチメン如月会が6月7日(土)にアイビーホール青学会館(渋谷区表参道)で開催されました。

この会は1988年にスタートいたしました。参加を呼びかけたのは、現役も退職された方も含め、経理本部に在籍された方々の親睦・懇親の機会を持つということでした。従い現役経理関係者の参加しやすい一番時間に余裕のある時季、即ち2月に開催しようと決め、第一回から2月に開催されてきました。

小職が幹事を仰せつかったのは、1999年(当時49歳)からですが、2月は陰暦で「如月(きさらぎ)」なので、そのまま「如月会」とさせて頂きました。幹事を引き受けてから今年で15年目の節目となります。おそらく永久幹事ということなのでしょう。おかげさまで、毎年反射的行動が取れるようになって1年間の暦のリズムとなっています。

近年、参加者は20人前後で確かに往年の参加者に比べると少なくなりました。2003年ニチメンが消失し双日が誕生してちょうど10年が経過したこと、回を重ねるたび高齢の会員が増え、新規参入が見込めない状況下、ここ数年参加者は逡巡の一途を辿っております。2012年には経理部所属の女性の皆さまにもご案内を差し上げ、何とか20人の皆さまの参加確保を遂げることが出来ました(出状総数66通、出席20名、うち女性5名)。一方、会員の高齢化に伴い、極寒の2月を避けて、爽やかな5月～6月の季節の開催にとの声が上がリ、この2年間はこの時季の開催となっております。

そんなわけで、会報は大阪を含め沢山の方が読んでおられるので之を機に、例会参加が増える事を期待して今回はじめて寄稿させていただきました。宜しく願いいたします。

さて、今年もいつものように全体撮影⇒開会挨拶⇒乾杯⇒歓談⇒出席者近況報告⇒歓談⇒欠席者からのお便り紹介⇒事務連絡等⇒会長挨拶⇒中締めと進み「ワイワイ、ガヤガヤ」「ああでもない、こうでもない」「三々五々」お互いに旧交を温め合う楽しいひと時を過ごすことが出来ました。

さて、来年も同じ季節、同じ会場で、開催する予定です。ニチメン経理本部に係る老若男女の皆さま、是非この機会をご利用いただきたいと思います。

最後に、皆さまとお会いできることを楽しみに、また皆さまの益々のご健勝を祈念いたしますとともに、経理部懇親会を今後も継続発展させて行きたいと思っておりますので宜しくお願い申し上げます。



向かって左下段：細井衛、三浦甲蔵、名島憲一郎、三分一克美、永田堅志郎、村澤醇治、金井湧二、西川周  
向かって左上段：星野則和、小林正典、福井芳樹、大羽陽一郎、梶淵磐夫、浅利眞司、山本昌裕、太田弘之、  
小竹浩之、西川眞司

## ミニMSD会とミニMSA会の合同懇親会

大 平 栗 雄

MSDとMSAというのは、御存じの方もおられるでしょうが、ニチメン機械部門の一つ、原動機部（MSD）とその傘下のエンジン一課（MSA）の電略記号です。伝統のある部課だったので、過去の在籍者、携わった人々は多数おられると思いますがその何人かが時々 会って食事会をしている。

ミニMSD会は長谷川 洋さんが部長時代のメンバー中心、ミニMSA会は私が課長時代のメンバーが中心のかなり限定されたメンバーで参加者も6－8人と限られているので、それぞれに“ミニ”がついている。年代層の違いもあり、ミニMSD会は平日の昼食会を横浜・中華街で、ミニMSA会は母親、主婦業に多忙の女性陣と、私を除くと現役組の男性陣なので、夜に渋谷近辺とかで、二つの会が交差することはまったくなかった。

今般 ただ一人 二つの会のメンバーである大平がたまたま ミニMSA会でミニMSD会の存在を話すると、ミニMSA会の女性メンバーは、いずれも長谷川氏が原動機部長時代に入社、即原動機部に配属になった関係もあり「ミニMSD会のオジサマ方にも久しぶりに会って見たい」との話が出て、合同での懇親会を9月中旬にミニMSDの会場、横浜・中華街で行った。

最年長78歳から最若年は\*\*の幅広い年齢層で、総勢12名。

話題はどうしても女性陣中心となり、彼女たちは初めての社会人生活で当時の勤務状況を鮮明に覚えているが、男性軍はどうも記憶さだかでないケースが多々あり、女性陣から叱責、失笑をかったりして、大いに盛り上がったものです。三時間ほどの楽しい談笑、美味しい料理を終え、又の再会を約しての散会となりました。



出席者は写真参照。（敬称略）

前列：左から 藤井宏憲、小堀裕子、風間理恵、長谷川洋、北澤裕子

後列：左から 樋口龍彦、岡田茂、大平栗雄、南部捷朗、広本昌也、丸野純、漆崎隆司

\* 社友会の総会・新年会 御出席の方はよく御存じの 毎回 進行役をされている小堀裕子さんはミニMSA会のメンバーの一人です。

## "33会"有志による東西合同"傘寿の会"開催

神田久大・松尾哲雄

昭和33年(1958)は読売ジャイアンツに長嶋茂雄、南海ホークスに杉浦忠が入団した年。同じ年に、吾々は日綿実業株式会社に入社した。

あれから、もう57年の歳月が流れようとしている。人生80年、遙けくも来たもんだ。

11月19日、神戸市垂水区舞子の明石海峡大橋を眺望するレストラン「海彩園」にて、まず昼食会。次々に出てくる海鮮料理に舌鼓を打ちながら、久しぶりの再会を喜び合った。

中には30年、40年ぶりに会う友も居た。お互いに年を取って変貌著しいが、その顔、その声で若かりし日の面影を追うことが出来た。

舞子から神戸ハーバーランドを経て、すっかり復興なった神戸市街や山の手をシティ・ループバスで見学して、三宮よりバスで有馬温泉に向かう。有馬は日本最古の温泉で、日本書紀にも載っている。

周辺の紅葉は今が盛りだった。その日の宿『ダイヤモンド有馬温泉』に入る。

温泉につかり、浴衣に着替えて、晚餐会に向かう。

最近は、80歳のことを「アラサン」と言うそうだ。「傘寿」にかけた言葉のようだ。

今回は、本人またはご家族の病気のため已む無く欠席がかなり居た。また「ドタキャン」も二名いた。

夜の宴席そして、部屋に帰っての二次会では、談論風発、思い出話、今だから話そうの話題で持ち切りだった。

とにかくにも、この「アラサン会」に出席できた幸運と又次回も無事元気で会うことを誓い合った。

帰途、大阪中之島に出て、旧ニチメンビル前と淀屋橋で集合写真を撮り、淀屋橋周辺で昼食後、夫々家路についた。

埴生、大谷、大場、長谷川の関東組も遠路遥々の参加お疲れ様でした。(完)



舞子にて～、明石海峡大橋を背景にして～

前列左から； 菊澤 淳、大谷毅丈夫、埴生栄勇、大場禎治、神田久大（剛太郎）、  
後列左から； 田淵弘通、長谷川洋、白水 汎、津田忠佑、松本啓次、松尾哲雄。  
別枠左から； 橋本英雄、松田邦夫



## 二)「いろは句会」の三百回に至るまでの経緯

昭和64年1月7日昭和天皇の崩御に伴い政府は「平成」と改元を発表した

同年同月ニチメン保険センターの太田昭社長（元ニチメン常務）は社員と保険会社の担当社員に句会の結成を提案された今から25年前の事である

第一回は5名程で初心者ばかりであったところから「いろは句会」と命名されたが太田主宰には毎月一回の句会で会員に俳句の初歩を懇切丁寧に教えていただいた

会員も増えた頃から関東近辺の名所旧跡に出掛け宿泊を伴う吟行句会も楽しい行事となった今でも数々の思い出が写真とともに目に浮かぶものがある

平成13年（2001年）3月には太田昭さんが主宰をされていた他の句会をも合わせ総勢約80名が夜景も眩しいニチメン田町ビルの21階大食堂に集合し「ミレニアム合同句会」が開催されたのも一番華やかな頃ではなかったであろうか

更に「いろは句会」の行事として句集の編纂発行も行なった

100回句会記念に際し「緑風」を太田主宰の喜寿のお祝いに「喜びの日々」を平成23年2月2日の主宰ご逝去に伴う「太田あきら句集」などを会員自ら参画し印刷し製本に注力したものである

俳句は伝統的な日本文化としてのみならず今や欧米各国を始め世界的な広がり発展している我々いろは句会の会員も社友会・同好会の中でも最も長く活動をつづけていることを自覚しつつ会員個々に更に研鑽に励みたいと念じている次第である

以上



前列向かって左から  
後列左から

若月 義和  
久保田悦子

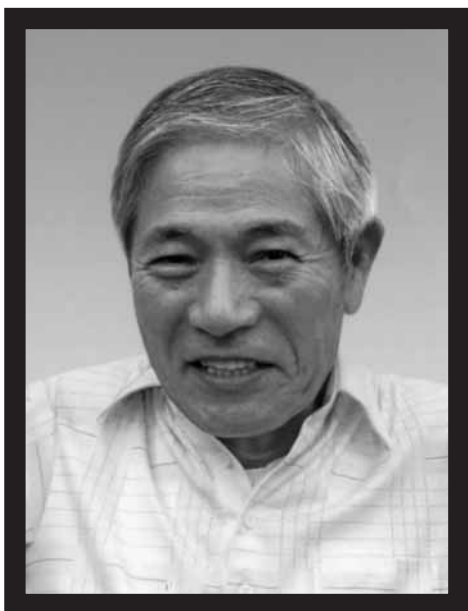
宇治田薫風  
藤野 徳子

塚本 光生  
三枝 一希

下川 泰子

**追悼文 Omnibus****田中稔昭さんの思い出**

丸 野 純



私が物資部で課長をしていた1998年4月、シンガポール支店長の任期を終え、木材物資本部に副本部長（物資本部長のハズが、物資本部が木材本部に吸収されてしまった為）として着任されて来られたのが、田中稔昭さんでした。

それ以来、出来の悪い私を叱咤しつつ、物資部、大淀製紙等で使い続けてくれました。

田中さんは、正義感に溢れ、仕事に全力投球し、努力を続ける事のできる”鉄の意思”を持った人でした。本当に尊敬できる人でした。

田中さんと私の関係を、田中さんが好きだった競馬で例えれば、”ズブい（騎手が必死に追わないと走らない馬）”上に、直線に向いてもすぐに”そらを使う（走ることに集中力を欠く）”ような駄馬と、それを巧みな手綱さばきとムチで必死に追って、能力以上の成績を出させる優秀な騎手のようなものでした。

よく考えてみれば、走っている馬よりも追っている騎手の方が大変だったでしょう。

田中さんのお陰で、サラリーマンとして、自分の能力以上の力を発揮することができました。本当に感謝しております。

因みに、競馬についてですが、結婚される際、奥様に「今後、馬券は買わない」と約束されたそ

うで、以後一切馬券は買わなかったが、競馬馬そのものを買うように（一口馬主など）なったと仰っていました。残念ながら、持ち馬は一勝もできなかった由。

田中さんは、2005年、故郷である岐阜の(株)シンガポール社長在任中に癌が発見され、すぐに手術し療養に専念。その後、体調が回復されから、(株)ゼンショー（すき家、なか卯等を運営する今話題のブラック企業）の小川社長から、子会社日本ウェンディーズ（当時、日本に71店舗を有したハンバーガーチェーン）の再建を託され、2007年11月から専務（実質的な責任者）として勤務されました。病み上がりで、流石に体力的に一人では無理と判断された由で、両親の介護でニチパックを退職していた私が呼ばれ、私は2008年1月から、田中さんの下で働き始めました。しかし、3ヶ月も経たないその年の3月、田中さんに癌の転移が見つかり、その6月に2回目の手術をされ、会社を退職され、療養に専念されました。結局、田中さんにとって、私が最後の部下となってしまいました。

一回目の手術をした医者からは、「確かに”働いてもいい”とは言ったが、まさかフルタイムでそんなハードに働くとは！」と呆れられた由。

「適当に働く」と言う言葉は、田中さんの辞書にはありませんね。

その後、何回も手術をされたのですが、術後、体力が回復されると、いつもいつもゴルフに誘って頂きました。最後に田中さんとゴルフをしたのは、2014年3月12日でした。

2014年8月7日、大平栗雄さんと一緒に田中さんのお宅に伺ってお話したのが、田中さんとの最後となりました。田中さん、本当にありがとうございました。

ご苦労様でした。どうぞ、安らかにお眠り下さい。

## 「田中稔昭さんとの出会い」

大 平 栗 雄

故・田中稔昭さんは私と同年で

- ① 彼との初めての出会いは34－5歳頃、バン格拉ディシュのダッカで機械の長期出張員勤務の時に、彼が東京・合成樹脂部から出張してきた。田中さんは前年度にバン格拉政府公団向けにODA案件の大型初成約をしており、その年も同じ公団、同じ資金、同じ製品ということで、当然再契約をと乗り込んできた。

買い先の公団との関係で私が現地側の担当として商談にあたったが「色々な事情」があって、商談不成立。「誠に申しわけなし」との私のテレックスに対し、彼から「事情了解しています。今回はやむなしです。ご苦勞様でした」との逆に慰めの返事を貰い、叱責を覚悟していたので「おもしろい男だなあ」という印象を持った記憶がある。

- ② 二回目は51－2歳頃、台湾・台北に駐在員勤務の時に東京から電話があり「「色々な事情」があって、ニチメンを辞めることにした。

在職中はお世話になった。バングラの頃が懐かしいよ」と。

まだ若いし、彼の退職はわが社の大きな損失だと思い、なんとか引き留めをと思ったが、彼の頑固な一面をも知っているだけに諦めていたが、間もなくして、彼のシンガポール駐在が発表された。

やはり強烈に引き留める人達がいて、彼も海外での心機一転ということで思いとどまったらしい。当時、台北店とシンガポール店は業績不振、スタッフに問題有り共通点も多く、お互いに情報交換しながらHKAOQのもと、業容改善に奮闘した。

- ③ 三回目は57－8歳の頃、今度は私が「色々な事情」があって、会社を辞める事を決めた。その挨拶まわりに東京から大阪へ向かう新幹線の「のぞみ」が名古屋駅に停車した時、まったく偶然に目の前のプラットフォームに田中さんが立っていた。彼は大阪の関連会社に出向中で名古屋の出張から大阪へ戻るところだった。

車内から手を振る私を見て彼が隣の席に来て、新大阪までの一時間、私の退職とその経緯

を話したが、彼は「大平さん、私でもそのような状況なら会社止めるよ」と私の背中を押してくれた。

それから一カ月後、「本当に色々な事情」があって、なんと田中さんは出向中の関連会社から本社へ復帰、私がその後任として関連会社に出向くことになった。

上記の三回の出会い以外に私と田中さんはほとんど東京で会う事もなく、食事をする機会もなかった。お互い働き盛りで忙しかったとは言え、思えば不思議な縁である。

- ④ そして四回目、61－2歳の頃、私がサラリーマン最後の赴任地・広島に滞在の時、「腎臓がん」で摘出手術もあり、会社をやめる」との電話を受け驚いて、術後、彼の家に見舞った。「絶対に元気に復帰してみせる」と言っていたし、事実、その後一度は現役復帰を果たしたが、度重なるガンの転移で入院を繰り返す事になった。

- ⑤ リタイア後は、時々昔の仲間と共に食事などをしていたが、最後の出会いは71－2歳の今年の8月初め。入院中の田中さんから「もうダメだから、会いに来てくれ」という始めて彼の弱気な電話があり、彼が食べたいといていた鰻を持って丸野君と共に自宅に見舞った。まだ声にも張りがあり、入社直後の話から、奥様とのナレソメなど滔々としゃべっていたが、「自分の会社生活では、本当に多くの人にお世話になった。その人達に会って、一人ひとりにお礼を言いたい、それももはや、かなわない。大平さん、機会があれば皆さんに俺の気持ちを伝えてくれ」といった様なことも話していた。そして一カ月後彼の訃報が届いた。

9年と半年に及ぶ壮絶なガンとの戦いだった。

ただただ御冥福を祈るのみである。合掌

## 「田中稔昭さんの友情」

青 木 政 和

田中さんとは化工本部の部員として宝町、日本橋そして三田のオフィスに於いて永く共に仕事をさせて頂きました。彼が台湾やシンガポールに駐在された間もご交誼を続けさせて頂きました。

最近の数年間は年二回、彼のホームコースでゴルフを楽しませて頂いて居りました。

小生が妻を亡くした直後、彼の駐在先の台湾に出張を致しました。彼は、いつもの温かい眼差しで迎えてくれ、実直で誠実な心で私を力づけてくれました。ご自身の身の上話をまじえ夜中の三時まで話し合いました。最後に「再婚は慎重に考えろ」と一言云われました。

私は、唯々田中さんの友情が嬉しく有難く思いました。彌来30年。彼は「台湾では、余計なことを言ってしまった」と言い続けて居られました。私はそのたびに「否、心から感謝して居ります」

と答え続けて参りました。昨年11月拙作の油絵の展覧会に横浜まで駆けつけてくれた時に交したのが「その会話の」最後でした。

病魔に冒された体を強靱な精神力で支える彼に会うたびに勇気と元気を頂くのは、いつも私の方

でした。

今年7月末に電話でのご機嫌伺いの際に「薬の副作用で味覚が鈍く成ったが、うなぎはとても美味しく感じられる。」と言うので「お互いに現役時代の中国うなぎには芳しい思い出が無いから少し高いが国産うなぎを涼しく成ったら食べに行こう」との約束が最後に成ってしまいました。

10月、築地のうなぎ屋にてシンガポール店長の田中さんと香港の私が共に所属した「アジア・大洋州統轄役員室」の諸先輩方と集い、田中さんを偲びながら、彼との夏の約束を果たすことが出来ました。

温かい目をした田中さんに会えないのは寂しい限りですが、いつまでもこの集いが続けられれば良いと深く思っています。

伏目しつお重に散らす山椒の実

朋友が逝き紅味増したり曼珠沙華

田中稔昭さんの御冥福をお祈り申し上げます。



## 『心から感謝をこめて』

森 慈 郎

プラマテルズの井上社長から7月初めにお電話を頂いた。田中さんの具合があまり思わしくないと元日東紡績の宮井氏から聞いたので、一緒にお見舞いに上がりませんかと言うお誘いの電話でした。私は大阪に単身赴任していることもあり、田中さんにはお目に掛かりたいと思ってはいたものの中々時間が取れず、丁度良い機会と思い井上社長と共に7月31日にご自宅にお見舞いに伺いました。病気の関係で目が聊か不自由になっておられたものの、当日は大変お元気でした。仕事の話、プライベートな話、友人関係の話題等々、井上社長と共に、2時間以上に渡りお話をさせていただいたが、ご自分の病状については、極めて冷静にご理解されておられ、さながら昔の武士を思い起こさせるような凛とした態度であられたことが強く印象に残っています。

田中さんとの繋がりとは、私が1984年にニューヨーク駐在から帰任し、合成樹脂第3部に配属されたことから始まりました。日東紡績のガラス繊維を中心とした電気絶縁体関連商品の輸出入が主な業務でした。当時、コンピューター関係の技術はアメリカが最先端を行っており、そのアメリカンマーケットにガラス繊維を売り込むというやりがいのある仕事を田中さんの指導の下、推進していきました。関連商品として古河サーキットフォイル社銅箔のアメリカ、東南アジア向け独占的商権を獲得できました。非鉄金属部から、「なぜ合成樹脂部が銅箔を扱うのか」と言うクレームを頂いたのも懐かしい思い出です。

1992年に私は再びニューヨーク駐在となり、田中さんとの部下・上司と言う直接の関係は途絶えました。その後田中さんはシンガポール支店長として赴任され、シンガポール店の大改革を文字通り、命を懸けて行われ、帰国後、物資部の本部長として大淀製紙の整理等重要案件を見事に遂行されました。

思えば田中さんは不思議な方でした。いわゆる商社マンらしくない商社マンであられました。お酒はほぼ一滴もお飲みにならないし、無理やり人を説得するような強引さも持ち合わせておられな

い。勝負事も決して強い方ではなかった。けれども、彼の真面目さと優しさが強く人を引き付ける。彼の誠実な人格が人脈を広げ、次々と大きな仕事を成し遂げられました。

田中さんが亡くなられた後、9月末に彼の昔の部下が集まって細やかな「田中さんを偲ぶ会」を開きました。その中で出た言葉を書き残しておきたいと思います。

「田中さんから聞いたことが無いこと」

1. 部下を叱るどなり声
2. カラオケの歌声
3. 艶聞

「いつも田中さんから聞かされていたこと」

1. 奥様への思いやり
2. 奥様のお母様への感謝
3. 息子さんの自慢

本当に家族思いの優しい方でした。そして皆、田中さんが大好きでした。



## 田中稔昭さんを偲んで

井 上 正 博

9月12日朝、田中稔昭さんの訃報を合成樹脂部門の連絡網より受け取りました。田中さんは9月8日ご逝去され、告別式は11日午前ご家族にて秘めやかに執り行われたこと、直前には生前の皆様のご厚情に深謝されくれぐれもよろしく伝えてくれるよう奥様に頼まれての最後であったとのこと、田中さんらしい気配りだったと感じました。

田中さんに最後にお会いしたのは7月31日、大阪文化服装学院理事長の森慈郎さんと田中さん宅にお伺いし2時間ほど話をしたのが最後となりました。田中さんは目が不自由になってしまったことや、味が判らないことが不便と言っておられましたが、覚悟は出来ており出来るだけの準備をされたことや、古い出来事から最近の話まで話題は尽きませんでした。記憶の正確さ、話すスピード、声の張りも現役時代の田中さんと全く変わりませんでした。帰途、二人の共通の感想は、「田中さんは優しい奥様に支えられて幸せそうだった」との思いでした。

私の田中さんとの出会いの最初の記憶は、私が米国ニチメン・ニューヨーク店の駐在員として参加した1992年の米州合成樹脂会議の席でした。田中さんは当時工業資材部の部長補佐兼課長として会議に参加されました。その後、私は1992年の秋に帰国し、田中さんが課長をされていた工業資材部第2課に配属され、田中さんのご指導を受けながらマイクロガラス繊維、エアフィルター、建材、防音壁、無機フィラーなどの営業を担当しました。当時田中さんは重要得意先の日東紡績と極めて懇意にしており同社のあらゆる部門との人脈を確立されていて、同社の社内人事も田中さんのほうが社員より先に知っていると言われたほどでした。

その後田中さんはニチメンシンガポールの支店長として赴任されましたが、折りにふれ田中さんにはお世話になってきました。私は2007年春に双日台湾会社社長として台北に赴任しましたが、出発直前には台湾会社の重要なビジネスであった台湾プラスチック向けのガラス繊維ビジネスの責任者であった日東紡績の宮井氏に引き合わせてくれ、「井上をよろしく頼む」と言っていました。田中さんは以前ニチメン台湾に駐在されてお

りその時に宮井氏と共に創った台湾プラスチック向けのガラス繊維のビジネスが大きなビジネスとして残っておりました。台湾プラスチックの責任者も田中さんを良く覚えていただいております。台湾でなかなかお会いできないVIPとも親しく接することが出来ました。その後私は2010年4月に台湾より帰国し、現在のプラマテルズに勤務することになりましたが、田中さんとは折にふれ会食やゴルフを共に楽しみました。2013年の4月30日に多摩カントリーで田中さん、澤井さん、青木さんと晴天の下プレーしたのが最後となってしまいました。

私をこれまで導いて下さった先輩を失ったことは悲しく、今も田中さんの「井上君」と呼ぶ声が聞こえます。ご冥福をお祈りいたします。



## 【編集後記】

2014年も間もなく過ぎ行き、また数え年で一年増えることになる。

全く当たり前の話だが、フランク・シナトラのヒット曲；マイ・ウエイの冒頭の“*And now, the end is near. And so I face the final curtain*”が切々と響いてくる。これは真に自然の摂理で、抗することが出来ない。

この半年、ニチメンOB・OG東西あわせて二十名余が物故者リストに入られた。

本誌 P-15 - をご覧下さい。

一方において、2015新年会でお祝いを受けられる“白寿”一名、“米寿”六名の方々が居られる。

今回も、各方面から寄稿文やら各部門別懇親会の記事をたくさん寄せていただき紙面が多彩になりました。“FD会”（財務部）、“如月会”（経理部）は初登場です。

何と言っても、寄稿文の白眉は、高木亨一さんの『祖父高濱虚子と私』です。

身内の人ならではの書けない虚子の人間像が述べられている。

その他、それぞれに興味深いエッセイなど。それから、故田中稔昭さんに対するオムニバス追悼文が寄せられたこと、故人の人徳が偲ばれる。

度重なる手術を経て、なおかつ従容として最期を迎えられた由。

かつて故岩下恒則さんが、本誌で紹介していたズイチンスキー作曲『ウイーン我が夢の街』の2番；『私の意志にかかわらず、いつか、この世を去らねばならない。この幸福も終わりのだね、……いや私は消えやしない、天に昇り腰をおろすの、ウイーンを眺める為に……』を思い出した。泉下に眠ることなく、天に昇る手もあるようだ。

同君は、さらにHPで紹介していた；『生命とは我にかかわりなきものぞ 我が物にして、我が物にあらず』（窪田 空穂）を茲に記して、閣筆。

ご健勝にて新年を迎えられて、1月16日（金）社友会の新年会にお越し下さい。

（長谷川 洋）

## ニチメン東京社友会

〒100-8691 東京都千代田区内幸町2-1-1  
飯野ビルディング17F

|             |         |       |
|-------------|---------|-------|
| 発行人         | ；倉又 則夫  | 代表世話人 |
| 編集責任者       | ；長谷川 洋  | 世話人   |
| アドバイザー・スタッフ | ；倉持 次雄  | 世話人   |
|             | 竹内 可能   | 世話人   |
| 印刷所         | ；(有) 関内 | 印刷    |